

Sun Server X4-8 設置ガイド

ORACLE®

Part No: E55344-01
2014 年 6 月

Copyright © 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	7
設置手順の概要	11
サーバーの機能とコンポーネント	13
フロントパネルの機能	13
前面のインジケータモジュール	14
電源装置のコントロールとインジケータ	15
ファンモジュールのコントロールとインジケータ	16
バックパネルの機能	17
バックパネルのステータスインジケータとボタン	19
ストレージのコントロールとインジケータ	20
サーバーがサポートするコンポーネント	20
サーバーの管理	23
複数サーバー管理ツール	23
単一サーバー管理ツール	23
Oracle System Assistant	24
Oracle ILOM	25
Oracle Hardware Management Pack	25
UEFI BIOS	26
サーバーの設置準備	29
サーバーの仕様	29
物理仕様	29
電気仕様	30
環境要件	30
通気のガイドライン	31
出荷梱包インベントリ	32
必要な工具および装置	32
静電気放電に関する注意事項	33
オプションのコンポーネントの取り付け	33

ラックの設置手順	35
安全のための注意事項	35
ラックの互換性	36
▼ シェルフレールと背面固定部品の取り付け	37
▼ 出荷用留め具の取り付け (オプション)	42
▼ サーバーをラックに取り付ける	43
サーバーの配線	47
バックパネルのコネクタとポート	47
▼ サーバーのケーブル接続	48
Oracle ILOM への接続	51
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース	52
Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値	52
▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	53
▼ リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン	54
▼ Oracle ILOM CLI での IPv4 ネットワーク設定の変更	56
▼ Oracle ILOM CLI での IPv6 ネットワーク設定の変更	58
▼ Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更	61
▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	63
▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	64
▼ Oracle ILOM の終了	65
サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング	65
▼ Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット	65
▼ SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット	66
▼ root アカウントのパスワードの回復	66
Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	69
Oracle System Assistant の起動	69
▼ Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する	70
▼ Oracle System Assistant をローカルで起動する	72
▼ Oracle System Assistant の準備	73
OS インストールのためのサーバーの準備	74
▼ OS インストールのためのサーバーの準備	75
OS インストールのためのストレージドライブの構成	77
ストレージドライブ構成	77
Oracle System Assistant を使用した RAID の構成	79
▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成	79

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成	88
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成	97
Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成	97
Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用し た RAID の構成	100
オペレーティングシステムおよびドライバの設定	113
インストール済み Oracle Solaris OS の構成	115
Oracle Solaris 構成の準備	115
インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム上での RAID の制限	116
Oracle Solaris OS の構成ワークシート	116
▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構 成	118
Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール	120
Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント	121
インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成	123
インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件	123
Oracle VM 構成ワークシート	124
▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する	124
Oracle VM のドキュメント	128
インストール済みの Oracle Linux OS の構成	129
Oracle Linux 構成ワークシート	129
▼ インストール済みの Oracle Linux OS を構成する	130
▼ Oracle Linux OS を登録および更新する	133
サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	135
ファームウェアとソフトウェアの更新	135
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	136
入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	136
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	138
▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウ ロード	138
物理メディアをリクエストする	139
物理メディアのリクエストのための情報の収集	139
▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)	140
▼ 物理メディアのリクエスト (電話)	141
更新のインストール	142
ファームウェアのインストール	142

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール	143
システム電源の制御	145
サーバーの電源投入と電源切断	145
▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を切断する	146
▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を投入する	146
▼ Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する	147
設置の問題のトラブルシューティング	149
トラブルシューティングおよび診断の参考	149
技術サポート情報ワークシート	149
サーバーのシリアル番号の確認	150
索引	151

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、Oracle の Sun Server X4-8 用の最新のファームウェア、ソフトウェア、およびドキュメントの入手方法を説明します。フィードバック用のリンクおよびドキュメントの変更履歴も記載されています。

- [7 ページの「Sun Server X4-8 モデル命名規則」](#)
- [7 ページの「最新のファームウェアとソフトウェアの入手」](#)
- [8 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)
- [8 ページの「ドキュメントとフィードバック」](#)
- [8 ページの「このドキュメントについて」](#)
- [9 ページの「サポートとトレーニング」](#)
- [9 ページの「寄稿者」](#)
- [9 ページの「変更履歴」](#)

Sun Server X4-8 モデル命名規則

Sun Server X4-8 という名前の意味は次のとおりです。

- X は、x86 製品であることを意味します。
- 最初の数字 4 は、サーバーの世代を意味します。
- 2 番目の数字 8 は、プロセッサの数を意味します。

最新のファームウェアとソフトウェアの入手

Oracle x86 サーバー、サーバー (ブレード)、およびブレードシャーシのファームウェア、ドライバ、およびその他のハードウェア関連ソフトウェアは、定期的に更新されています。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant – これは、工場出荷時にインストールされる Sun Oracle x86 サーバー向けの新しいオプションです。これには必要なすべてのツールとドライバ

が含まれており、ほとんどのサーバーに取り付けられている USB ドライブ上にあります。

- My Oracle Support – <https://support.oracle.com>
- 物理メディアのリクエスト – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。サポート Web サイト上の「問合せ」リンクを使用してください。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X4-8	http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle ILOM のバージョンのドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle HMP のバージョンのドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ohmp/docs

このドキュメントについてのフィードバックは <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

このドキュメントについて

このドキュメントセット内の情報はトピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

サポートとトレーニング

次の Web サイトに追加のリソースがあります。

- サポート: <https://support.oracle.com>
- トレーニング: <http://education.oracle.com>

寄稿者

主な執筆者: Ray Angelo、Michael Bechler、Cynthia Chin-Lee、Lisa Kuder、Mark McGothigan、Ralph Woodley。

寄稿者: William Schweickert、Anthony Villamor、Mick Tabor、Richard Masoner、Tamra Smith-Wasel、Denise Silverman。

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントセットのリリース履歴です。

- 2014 年 4 月。初版。
- 2014 年 6 月。製品リリースのための変更。

設置手順の概要

次の表は、サーバーを正しく設置するためのタスクを示しています。

手順	説明	リンク
1	『Sun Server X4-8 プロダクトノート』でサーバーの最新の情報について確認します。	http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs
2	サーバーの設置準備をします。	「サーバーの設置準備」
3	サーバーの機能を確認します。	「サーバーの機能とコンポーネント」
4	別途出荷されたオプションのコンポーネントを取り付けます。	『Sun Server X4-8 サービスマニュアル』
5	サーバーのファームウェアやソフトウェアを取得する手順を確認します。	「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」
6	サーバーをラックに取り付けます。	「ラックの設置手順」
7	データケーブルと電源コードをサーバーに接続します。	「サーバーの配線」
8	Oracle System Assistant を使用してシステムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	69 ページの「Oracle System Assistant の起動」
9	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続します。	「Oracle ILOM への接続」
10	サーバーのドライブを準備し、RAID を構成します。	「OS インストールのためのストレージドライブの構成」
11	該当する場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを構成します。	■ 「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」 ■ 「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」 ■ 「インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成」
12	該当する場合は、次のいずれかのオペレーティングシステムまたは仮想マシンのソフトウェアをインストールします。	『Sun Server X4-8 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』 『Sun Server X4-8 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』

手順	説明	リンク
		『Sun Server X4-8 Oracle VM インストールガイド』
		『Sun Server X4-8 Microsoft Windows オペレーティングシステムインストールガイド』
		『Sun Server X4-8 VMware ESXi インストールガイド』
13	システムの電源を制御する手順を確認します。	「システム電源の制御」
14	設置の問題をトラブルシューティングします。	「設置の問題のトラブルシューティング」

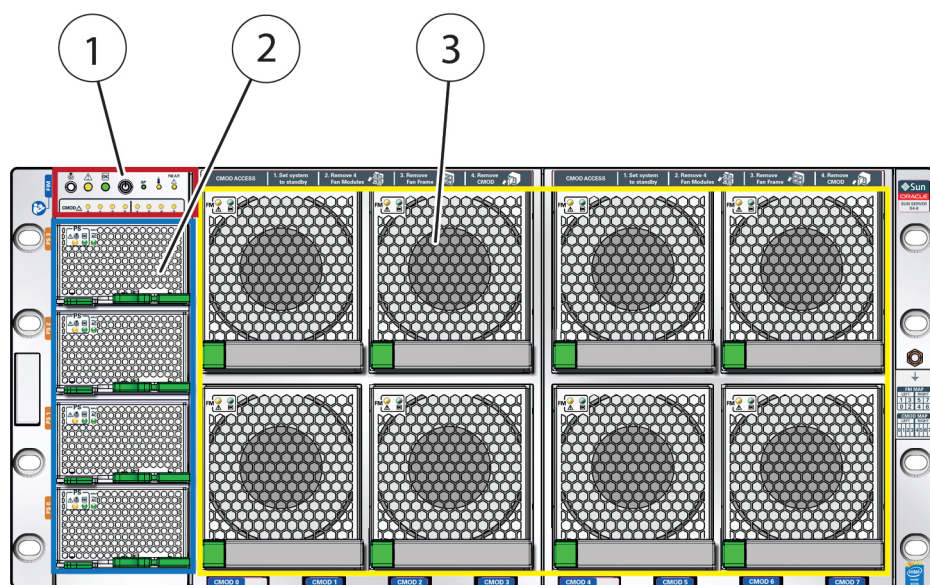
サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、Oracle の Sun Server X4-8 ハードウェアについて説明します。ここでは、次のトピックについて説明します。

説明	リンク
サーバーのフロントパネルおよびバックパネルにあるステータスインジケータ、コネクタ、およびストレージドライブの場所を確認します。	■ 13 ページの「フロントパネルの機能」 ■ 17 ページの「バックパネルの機能」
サーバーの機能とコンポーネントを確認します。	20 ページの「サーバーがサポートするコンポーネント」
サーバー管理ソフトウェアを確認します。	「サーバーの管理」

フロントパネルの機能

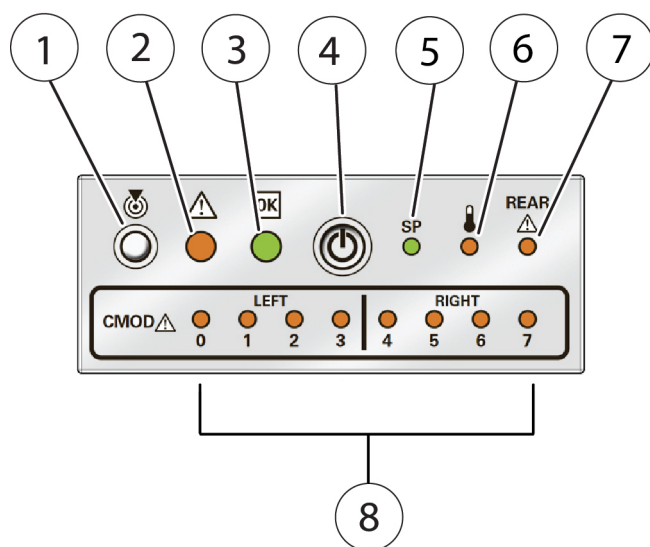
次の図で Sun Server X4-8 のフロントパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し	説明
1	前面のインジケータモジュール
2	電源 0 (下) - 3 (上)
3	ファンモジュール (FM 0 - FM 7) ■ 上の列: 1, 3, 5, 7 ■ 下の列: 0, 2, 4, 6

前面のインジケータモジュール

次の図は前面のインジケータモジュールのコントロールとインジケータを示しています。

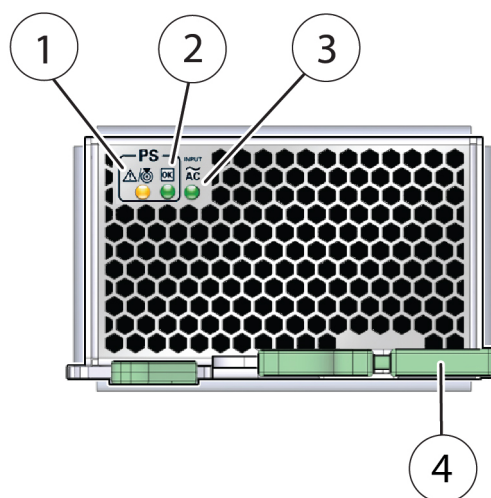


吹き出し	説明
1	シャーシのロケータボタンおよびインジケータ
2	シャーシ障害インジケータ
3	電源 OK インジケータ
4	埋め込み式の電源ボタン
5	サービスプロセッサ OK インジケータ
6	シャーシ温度障害インジケータ
7	シャーシ背面障害インジケータ
8	CMOD 障害インジケータ 0 - 7 (左から右) 注記 - サーバーのファンの背後には 4 つまたは 8 つの CMOD (計算モジュール) が搭載されており、左から右に CMOD 0 - CMOD 7 と指定されています。各 CMOD に対応するインジケータがあります。

注記 - システムの電源および関連するコントロールとインジケータの詳細は、「[システム電源の制御](#)」を参照してください。

電源装置のコントロールとインジケータ

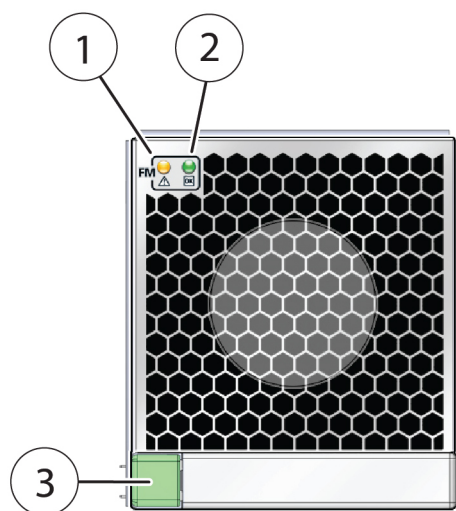
次の図は、電源装置のコントロールとインジケータを示しています。



吹き出し	説明
1	PSU 障害/位置特定インジケータ
2	PSU OK インジケータ (ホストへの電源 OK)
3	PSU AC OK インジケータ (AC 入力電力 OK)
4	リリースラッチ

ファンモジュールのコントロールとインジケータ

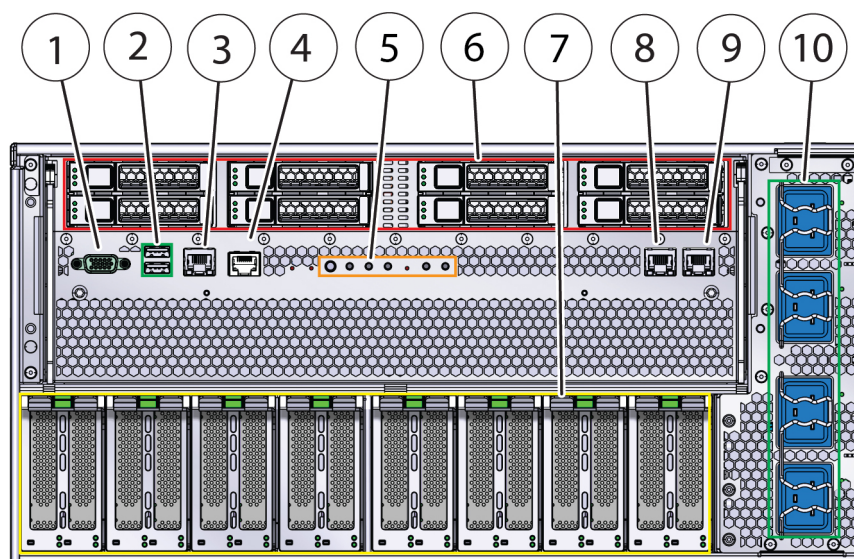
次の図は、ファンモジュールのコントロールとインジケータを示しています。



吹き出し	説明
1	障害インジケータ
2	OK インジケータ
3	リリースラッチ

バックパネルの機能

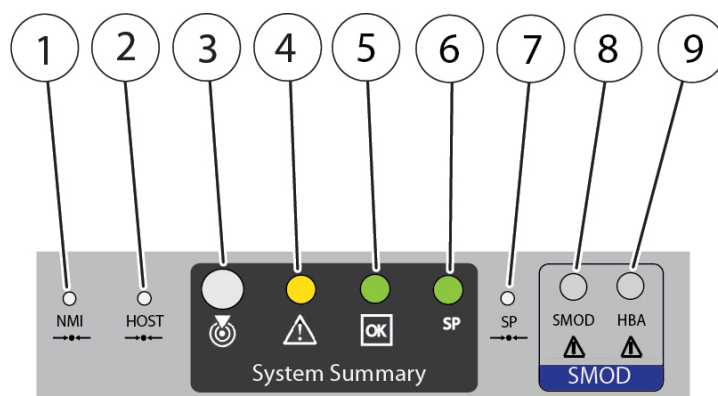
次の図で Sun Server X4-8 のバックパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し	説明
1	DB-15 ビデオポート
2	USB 2.0 ポート (2)
3	ネット管理ポート
4	シリアル管理ポート
5	ステータスインジケータ
6	HDD/SSD スロット 0 - 7 ■ 上の列: 7、5、3、1 ■ 下の列: 6、4、2、0
7	PCIe カードスロット 1 - 16 ■ PCIe 1 が右です ■ PCIe 16 が左です PCI カードはデュアル PCIe カードキャリア (DPCC) に取り付けられます。各 DPCC に PCIe スロットが 2 つあります。
8	Net 0 ポート
9	Net 1 ポート
10	ケーブルクリップ付き AC 入力 (0 - 3) ■ AC 入力 3 がいちばん上 ■ AC 入力 0 がいちばん下

バックパネルのステータスインジケータとボタン

次の図は、バックパネルのインジケータとボタンを示しています。

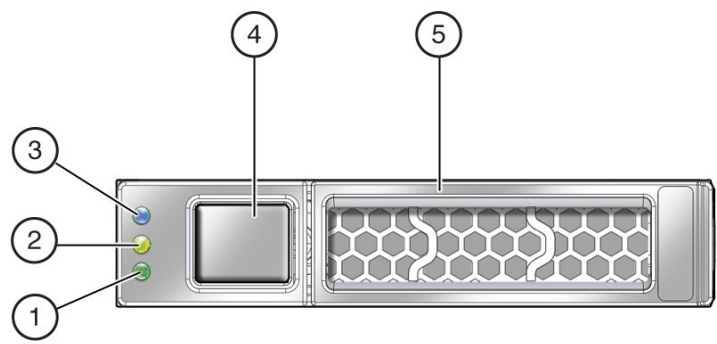


吹き出し	説明
1	マスク不可割り込み (NMI) ボタン - Oracle 保守担当者が使用します。
2	リセットボタン - Oracle 保守担当者が使用します。
3	位置特定ボタン/インジケータ - サーバーの特定に使用します。詳細は、次にある Oracle ILOM ドキュメントライブラリ を参照してください。 http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
4	シャーンシ障害インジケータ - 詳細は、『 Sun Server X4-8 サービスマニュアル 』を参照してください。
5	電源/OK (緑色のインジケータ) - 詳細は、『 システム電源の制御 』を参照してください。
6	SP OK/障害 (緑色のインジケータ) - SP の動作中は常時点灯、SP のブート中は点滅、SP に電源が入っていない場合はオフ。
7	SP リセットボタン - Oracle 保守担当者が使用します。
8	SMOD 障害インジケータ - システムモジュール (SMOD) の障害 (黄色) を示します
9	HBA 障害インジケータ - ホストバスアダプタ (HBA) の障害 (黄色) を示します

注記 - システムの電源および関連するコントロールとインジケータの詳細は、「[システム電源の制御](#)」を参照してください。

ストレージのコントロールとインジケータ

次の図は、ストレージのコントロールとインジケータを示しています。



吹き出し	説明
1	OK インジケータ (緑色)
2	障害インジケータ (黄色)
3	取り外し可能インジケータ (青色)
4	ストレージドライブのリリースボタン
5	ストレージドライブのレバー

サーバーがサポートするコンポーネント

次の表は、Sun Server X4-8 でサポートされるコンポーネントを一覧して説明しています。

コンポーネント	説明
CPU モジュール (CMOD)	4 または 8 つの CPU モジュール、それぞれ 1 つの Intel Xeon® E7-8895 V2 プロセッサを搭載。 サポートされている構成 ■ スロット 0 - 3 に取り付けられた 4 つの CPU モジュール

コンポーネント	説明
	■ スロット 0 - 7 に取り付けられた 8 つの CPU モジュール CPU の仕様に関する最新の情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X4-8 のページを参照してください。 http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html
メモリー	DIMM 192 枚まで (各 CPU モジュールに 24 枚) 16GB DDR3 ECC Registered DIMM または 32GB DDR3 Registered ECC LRDIMM 6T バイトの最大メモリー容量
ストレージデバイス	8 台の 2.5 インチ SAS-2 ハードディスクドライブ (HDD) (背面アクセス可能、ホットスワップ可能) または 8 台の 2.5 インチ eMLC SATA-3 ソリッドステートドライブ (SSD)、最大内蔵ストレージ 9.6T バイト
USB 2.0 ポート	USB ポート 4 個 (外部 x 2、内部 x 2)
VGA ポート	VGA 1280 x1024 8MB @ 60 Hz グラフィックコントローラポート 1 個
PCI Express 3.0 I/O スロット	デュアル PCIe カードキャリア (DPCC) 8 つ。それぞれに 2 つの PCIe 3.0 カードスロット PCIe 3.0 スロット 16 個 (x8 スロット 8 個、x16 スロット 8 個)、ホットスワップ可能、DPCC 使用
PCI Express I/O カード	お客様が注文できる I/O カードの一覧については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X4-8 のページを参照してください。 http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html
Ethernet ポート	1G ビット/秒オンボード Ethernet ポート 2 個
サービスプロセッサ	Oracle Integrated Lights Out Manager は Emulex Pilot 3 ベースボード管理コントローラ (BMC) を使用します。次を提供します。 ■ リモートのキーボード、ビデオ、マウスのリダイレクション ■ コマンド行、IPMI、およびブラウザインタフェースによる完全なリモート管理 ■ リモートメディア機能 (DVD、CD、ISO イメージ) ■ 高度な電源管理およびモニタリング ■ Active Directory、LDAP、RADIUS のサポート ■ デュアル ILOM フラッシュ ■ 署名付き ILOM
電源装置	冗長、ホットスワップ対応、フロントアクセス可能な電源装置 4 台
冷却ファン	シャーシの前面のホットスワップが可能な冗長ファンモジュール (8 つ)。電源装置ごとの冗長ファン
オペレーティングシステム	■ Oracle Solaris (事前インストールオプション) ■ Oracle Linux (事前インストールオプション) ■ Oracle VM (事前インストールオプション) ■ Red Hat Enterprise Linux ■ SuSE Linux Enterprise Server ■ Microsoft Windows Server ■ VMware ESXi

サーバーがサポートするコンポーネント

コンポーネント	説明
	ソフトウェアの詳細は、次を参照してください。 https://wikis.oracle.com/display/SystemsComm/Home#tab:x86-Systems-Options-and-Downloads
管理ソフトウェア	次のオプションを使用できます。 ■ サービスプロセッサ上の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。 ■ オプションの内蔵 USB フラッシュドライブ上の Oracle System Assistant (OSA)。 ■ Oracle サイトからダウンロード可能な、Oracle Enterprise Management Ops Center。

サーバーの管理

サーバーの設置後、複数サーバー管理ツールまたは単一サーバー管理ツールを使用してサーバーを管理できます。

- [23 ページの「複数サーバー管理ツール」](#)
- [23 ページの「単一サーバー管理ツール」](#)

複数サーバー管理ツール

Oracle は複数のサーバーを管理するためのツールを提供しています。次のツールがあります。

- 使用しているサーバーが多数の x86 および SPARC サーバーのうちの 1 つであり、単一のインタフェースから管理する場合は、Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。
- エンタープライズサーバーをモニターする場合は、Sun Management Center を利用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/systems/patches/sysmgmt/smc-jsp-138444.html> を参照してください。
- すでにサードパーティーのシステム管理ツールがある場合は、サーバーを多数のサードパーティーツールに組み込むことができます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。

単一サーバー管理ツール

次の表は単一サーバーの管理に使用できるツールを一覧しています。

ツール/リンク	タイプや環境	機能
24 ページの「Oracle System Assistant」	インストール済みです。サーバーの内部の USB ドライブに組み	サポート対象のオペレーティングシステムのインストール、およびローカルまたはリモートでのサーバーハードウェアの構成や更新を行います。

ツール/リンク	タイプや環境	機能
	込まれます。インストールは必要ありません。 ツールはホスト上でブートします。これはグラフィカルユーザーインターフェースを備えており、ホストオペレーティングシステムからファイルブラウザを使ってアクセス可能なファイルを含んでいます。	
25 ページの「Oracle ILOM」	インストール済みのサービスプロセッサ (SP) ユーティリティ。インストールは必要ありません。初期構成が若干必要となります。 ホストから独立して動作します。 Web インタフェースとコマンド行インタフェース (CLI) を提供します。	サーバーコンポーネントをローカルまたはリモートで構成および管理します。専用のネットワークポート、サイドバンドポート、またはローカルシリアルポートに接続します。
25 ページの「Oracle Hardware Management Pack」	アドオンのソフトウェアパック。Oracle System Assistant から取得するか、http://www.oracle.com/goto/system-management からダウンロードします。 オペレーティングシステムレベルで動作するコマンドやエージェントを備えており、複数のシステムにわたって使用可能です。	SNMP を使ってリモートから、またはコマンド行インタフェースツールを使ってローカルで、ホストオペレーティングシステム経由でハードウェアをモニターします。
26 ページの「UEFI BIOS」	アクセスするには、システムをブートしてブートプロセスに割り込みをかけます。単純なグラフィカルユーザーインターフェースを提供します。	システム機能のハードウェアレベルの管理を提供します。

これらのツールの詳細は、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うためのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System

Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Oracle VM、Linux、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、およびサーバーハードウェアの構成を行うことができます。Oracle System Assistant は、サーバーを購入するときに利用できる、出荷時にインストール済みのオプションです。サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、内蔵 USB フラッシュドライブ上にあります。

Oracle ILOM

Oracle ILOM はサーバーモジュールコンポーネントのモニターと管理に使用するサーバーの組み込み機能です。

Oracle ILOM ソフトウェアの機能を次に示します。

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報のモニタリングと記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

次のいずれかの方法でサーバーの SP にアクセスできます。

- [54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

Oracle Hardware Management Pack

Oracle Hardware Management Pack (HMP) は、サーバー管理用のコマンド行インタフェース (CLI) ツール群と、SNMP モニタリングエージェントを提供します。

- Oracle Server CLI ツールを使用して、Oracle サーバーを構成できます。CLI ツールは、Oracle Solaris、Oracle Linux、Oracle VM、Linux のその他のバリエーション、および Windows オペレーティングシステムで動作します。これらをスクリプト内で使用すれば、サーバーの種類が同じであるかぎり、複数のサーバーをサポートできます。
- Hardware Management Agent SNMP プラグインがあれば、SNMP を使用することにより、Oracle サーバーやサーバーモジュールを単一のホスト IP アドレスを使ってオペレーティングシステムからモニターできます。このため、2 つの管理ポイント (Oracle ILOM とホスト) に接続する必要がなくなります。

Hardware Management Agent は Oracle ILOM との間で情報のフェッチやプッシュを行います。SNMP プラグインは業界標準の SNMP ユーザーインタフェースを提供します。

UEFI BIOS

Sun Server X4-8 には、Unified Extensible Firmware Interface 互換 BIOS (UEFI BIOS) が搭載されており、Legacy BIOS の制限の多くを回避します。ただし、オペレーティングシステムの中には UEFI ブートモードではブートできないものがあるので、UEFI BIOS にはブートモードを UEFI またはレガシーから選択する機能が備わっています。デフォルトは、Legacy ブートモードです。

ブートモードを変更すると、以前のモードのブート候補は表示されなくなります。BIOS コマンド「Save Changes and Reset」の発行後に、新しいモードのブート候補が表示されます。元の状態に戻せるように、Oracle ILOM の BIOS バックアップおよび復元機能を使って構成を保存しておいてください。Oracle ILOM の詳細は、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ドキュメント (<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>) を参照してください。

次の表は、BIOS のブートモードを説明しています。

ブートモード	説明
Legacy ブートモード	ホストバスアダプタ (HBA) でオプション ROM を使用できるようにする、ソフトウェアまたはアダプタに UEFI ドライバがない場合、またはシステムでオプション ROM を使用している場合は、Legacy ブートモードを選択します。 Legacy ブートモードがデフォルトのブートモードです。Legacy ブートモードでは、Legacy ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの画面の「Boot Options Priority」リストに一覧表示されます。 注記 - ブートモードを選択し、オペレーティングシステムをインストールしたあとは、サーバーをリブートして、別のブートモードを選択しても、インストールしたイメージはアクセスすることも使用することもできません。
UEFI ブートモード	ソフトウェアおよびアダプタに UEFI ドライバが付属しているときは、UEFI ドライバを使用する UEFI ブートモードを選択します。UEFI ブートモードは設定中に手動で選択します。選択を行う手順については、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs) を参照してください。 UEFI ブートモードでは、UEFI ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの画面の「Boot Options Priority」リストに表示されます。

ブートモード	説明
	次のリストは UEFI ブートモードのサポートに必要な最低限のオペレーティングシステムのバージョンを示しています。 ■ Oracle Solaris 11.1 ■ Oracle Linux 6.x ■ Red Hat Enterprise Linux 6.x ■ SUSE Linux Enterprise Server 11 SP3 ■ Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1 および Microsoft Windows Server 2012 ■ VMware ESXi 5.x その他すべてのオペレーティングシステムでは、Legacy ブートモードを使用する必要があります。最新のリストについては、『<i>Sun Server X4-8 プロダクトノート</i>』を参照してください。 注記 - ブートモードを選択し、オペレーティングシステムをインストールしたあとは、サーバーをリブートして、別のブートモードを選択しても、インストールしたイメージはアクセスすることも使用することもできません。

UEFI BIOS の詳細は、『*Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド*』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

サーバーの設置準備

このセクションでは、サーバーをラックに設置する前に把握しておく必要のある情報について説明します。次が含まれます。

説明	リンク
サーバーの物理、電気、および環境仕様を確認します。	29 ページの「サーバーの仕様」
ラックマウントサーバーの通気や冷却の要件を確認します。	31 ページの「通気のガイドライン」
サーバーの梱包を解き、出荷キットの内容を確認します。	32 ページの「出荷梱包インベントリ」
設置に必要な道具を組み立てます。	32 ページの「必要な工具および装置」
ESD に関する要件を確認し、安全対策を施します。	33 ページの「静電気放電に関する注意事項」
オプションのコンポーネントがあれば、それらをサーバーに取り付けます。	33 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」

サーバーの仕様

このセクションでは、システムの物理、電気、および環境の仕様について説明します。

物理仕様

次の表に、Sun Server X4-8 の物理仕様の一覧を示します。

パラメータ	値
高さ	5U/219.25 mm (8.63 インチ)
幅	445 mm (17.5 インチ)
奥行	834 mm (32.8 インチ)
重量	114 kg (250 ポンド)

電気仕様

次の表に、Sun Server X4-8 の電気仕様の一覧を示します。

注記 - 電力消費に関する最新情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X4-8 のページを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>

パラメータ	値
公称入力周波数	50/60 Hz
動作入力電圧範囲	200 - 240VAC
定格入力電流	23A @ 200 - 230 VAC 最大 12A (コードあたり)
最大消費電力	3400 W
最大熱出力	11600 BTU/時

環境要件

次の表に、Sun Server X4-8 の環境要件を一覧表示します。

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	海拔ゼロで 5°C - 35°C (41°F - 95°F) 標高ゼロで 5°C - 31°C (41°F - 88°F)
動作時温度	5°C - 35°C (4°F - 95°F)
非動作時温度	-40°C - 70°C (-40°F - 158°F)
動作時湿度	10 - 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度	最大 93% の相対湿度、結露なし
動作時高度	最高 3,000 m (9,840 フィート)、高度 900 m 以上 では 300 m 上昇するたびに最高周囲温度が摂氏 1

パラメータ	値
	度低下。最大高度 2,000 m への設置が規制されている中国市場を除く
非動作時高度	0 - 12,000 m (0 - 40,000 フィート)
音響ノイズ	音響ノイズ: 7.7 B 動作時、6.8 B アイドリング時 — (LwAd: 1 B=10 dB)

通気のガイドライン

Sun Server X4-8 のようなラックマウント可能なサーバーや装置は通常、ラックの前面から冷たい空気を取り込み、ラックの背面から暖かい空気を排出します。冷却は前面から背面へ行うため、左右の側面に関するエアフロー要件はありません。

エアコン設備は通常、コンピュータルーム全体の温度や湿度を厳密にモニターおよび制御するわけではありません。一般に、ルーム内のメインユニットやその他のユニットの複数の排気口に対応する個々のポイントで、モニタリングが行われます。

床下通気を使用する際には、特に湿度に注意を払うべきです。床下通気を使用する場合、各排気口に近いポイントごとに、モニタリングが行われます。部屋全体の温度や湿度の分布は均一ではありません。

Sun Server X4-8 は、自然対流のエアフロー内に設置された場合に機能するように設計されています。環境仕様を満たせるように、次の要件に従う必要があります。

- システム内に十分なエアフローがあることを確認します。
- 吸気口がシステムの前面に、排気口がシステムの背面に存在していることを確認します。
- システムの前面に 1,232 mm (48.5 インチ) 以上、背面に 914 mm (36 インチ) 以上の通気用の隙間を確保します。
- シャーシの通気が妨げられていないことを確認してください。正常な動作条件では、サーバーは合計 100 CFM の通気を達成できる内蔵ファンを使用します。
- サーバーを通過する空気の温度は 68°F (20°C) を超えないようにしてください。
- 空気が、サーバーの正面から吸気され、背面に排気されることを確認してください。
- サーバーの吸気および排気の両方に使用されるキャビネットドアなどの通気口が塞がれていないことを確認してください。たとえば、Oracle の Sun Rack II は冷却に最適化されています。前面ドアと背面ドアの穿孔はどちらも 80% なので、ラック内で高レベルのエアフローを実現できます。
- サーバーを取り付ける際は、サーバー正面に 1 インチ (2.5 mm) 以上、サーバーの背面に 3.15 インチ (80 mm) 以上のスペースが必要です。

これらのスペースの値は、前述の吸気および排気のインピーダンス (使用可能な開口部) に基づいたもので、開口部が吸気および排気面に均一に分散していると仮定しています。これらの値により冷却パフォーマンスも向上します。

注記 - キャビネットドアやドアからサーバーまでのスペースなど、吸気および排気に関する制限の組み合わせは、サーバーの冷却パフォーマンスに影響を与える可能性があります。これらの制限を評価する必要があります。サーバーの配置は高温の環境で特に重要です。

- ラックまたはキャビネット内で排気が再循環しないように考慮してください。
- サーバーの排気口の妨げにならないように、ケーブルをまとめてください。

出荷梱包インベントリ

出荷用梱包箱を検査して、物理的な損傷がないかどうかを確認してください。出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いを要請してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

Sun Server X4-8 に同梱されているアイテムは次のとおりです。

- 電源コード (カントリーキットに別途梱包)
- シェルフレールと設置指示書を含むラックマウントキット
- その他のハードウェアおよびケーブル
- *Sun Server X4-8 のスタートガイド*
- 使用条件と安全性に関するドキュメント

必要なサーバーコンポーネントとほとんどのオプションは出荷時に取り付けられています。ただし、一部の注文オプションは別にパッケージ化される場合があります。

可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーのオプションの取り付け手順については、[33 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)を参照してください。

必要な工具および装置

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)

- ESD マットおよび接地ストラップ
- 機械式リフト

また、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスも必要です。

- ワークステーション
- ASCII 端末
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

静電気放電に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置または保守時には、次に注意してください。

- 静電気防止用リストストラップ、フットストラップまたはこれらに相当する安全装置。
- コンポーネントは、静電放電マット、静電気防止バッグ、使い捨て静電気防止マットなどの静電気防止面の上に置きます。



注意 - 装置の損傷。静電気損傷によりシステムが永久に使用不能になったり、認定を受けた保守担当者による修理が必要になったりすることがあります。

オプションのコンポーネントの取り付け

標準のシステムコンポーネントは工場で取り付けられています。標準構成とは別に購入したオプションのコンポーネントは、個別に出荷され、ほとんどの場合、サーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

次のオプションのコンポーネントを注文および別途購入できます。

- PCIe カード
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ
- ソフトウェアメディア

オプションのコンポーネントを取り付けるには、CPU モジュール (CMOD) またはシステムモジュール (SMOD) の上部カバーにある保守ラベルを参照するか、『[Sun Server X4-8 サービスマニュアル](#)』に記載されているコンポーネント保守手順を参照してください。

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、次を参照してください。

https://support.oracle.com/handbook_private/

ラックの設置手順

このセクションでは、ラックマウントキットに含まれているシェルフレール構成部品を使用して、サーバーをラックに設置する手順を説明します。レール構成部品を購入した場合は、この手順を実行します。

Sun Server X4 - 8 にはスライドレールがありません。一度ラックに設置すると、取り外さないかぎりラックからスライドさせて引き出すことはできません。ただし、取り外さなくても、ほとんどすべてのコンポーネントは前面または背面からアクセスできます。

注記 - このガイドでは、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

説明	リンク
安全上の注意事項を確認します。	35 ページの「安全のための注意事項」
ラックの互換性要件を確認します。	36 ページの「ラックの互換性」
サーバーをラックに取り付けます。	43 ページの「サーバーをラックに取り付ける」
出荷用留め具を取り付けまたは取り外します (オプション)	42 ページの「出荷用留め具の取り付け (オプション)」

安全のための注意事項

このセクションでは、サーバーをラックに設置する際に従う必要のある安全上の注意事項について説明します。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止バーを伸ばします。



注意 - コンポーネントが損傷します。密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。装置は常に、サーバーに指定された最大周辺温度 (TMA) に適合する環境内に設置してください。サーバーの環境要件については、[30 ページの「環境要件」](#)を参照してください。



注意 - 装置の損傷。装置をラック内に設置する際に、装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。

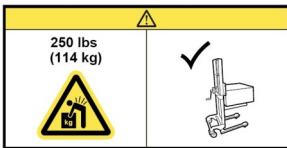


注意 - 回路の過電流。電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。これについて対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力に従った配慮が必要です。



注意 - 装置の損傷。接地を適切に行なってください。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (電源タップの使用など) の場合は、特に注意してください。

次の表は、その他の警告を示すため装置に記されている図を示しています。

図	説明
	これは、感電する可能性がある部分に手を触れないよう注意を促す記号です。
	これは、サーバーの持ち上げを禁止し、機械式リフトの使用を促す記号です。

ラックの互換性

ラックと、シェルフラック構成部品および背面固定部品との互換性があることを確認します。これらのコンポーネントは、次の表に示す標準を満たす装置ラックと互換性があります。

項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストのラックとは互換性がありません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。M6 または 9.5 平方ミリメートルのねじ穴だけがサポートされています。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	最小 610 - 最大 915 mm (24 - 36 インチ)。
前側取り付け面の前面の隙間	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後の隙間	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで 900 mm (35.5 インチ) 以上の間隔があること、ケーブル管理アームを使用しない場合は 770 mm (30.4 インチ) 以上であること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の隙間の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。
サーバーの寸法	奥行き: (PSU ハンドルを含まない長さ): 732 mm (28.82 インチ)
	幅: (耳を含まない長さ): 436.5 mm (17.19 インチ)
	高さ: 129.85 mm (5.11 インチ)

▼ シェルフレールと背面固定部品の取り付け

始める前に Sun Server X4-8 を設置するラック内の位置を特定します。5 ラックユニットが必要です。

ラックが[36 ページの「ラックの互換性」](#)の要件を満たしていることを確認します。



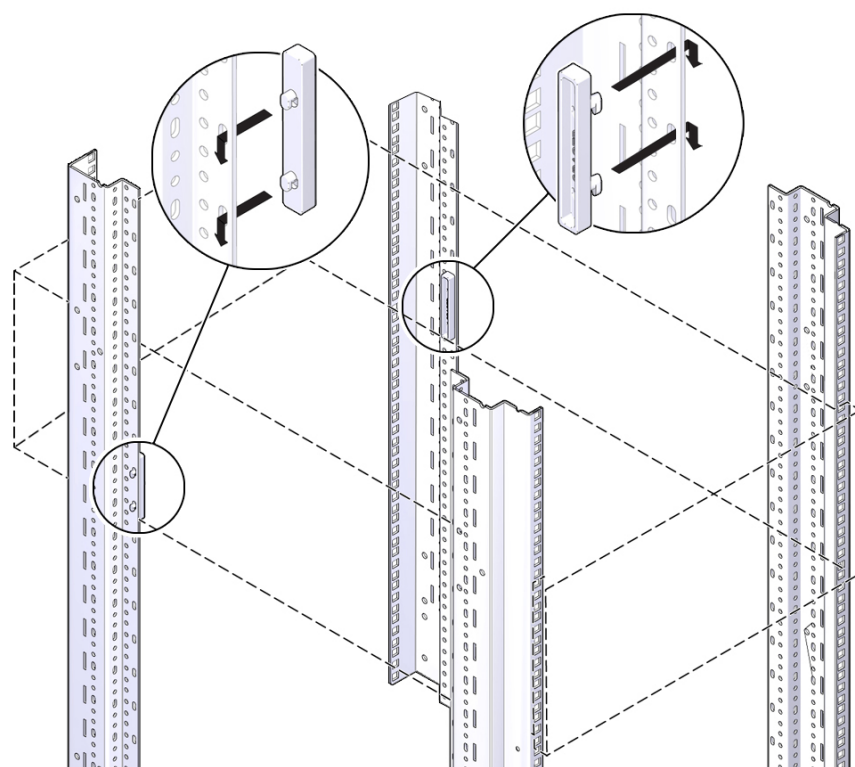
注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。機器の設置中にラックが倒れないように、ラックの転倒防止バーを配備してください。

1. ラック内のサーバーの位置を決定します。

Sun Server X4-8 は 5 ラックユニットを必要とします。

2. 背面ラックレールに 2 つのスペーサーを取り付けます。

スペーサーのスタッドは背面ラックレール内側の楕円形の穴に適合します。スペーサー下部をシステムのラックスペースのいちばん下に合わせます。

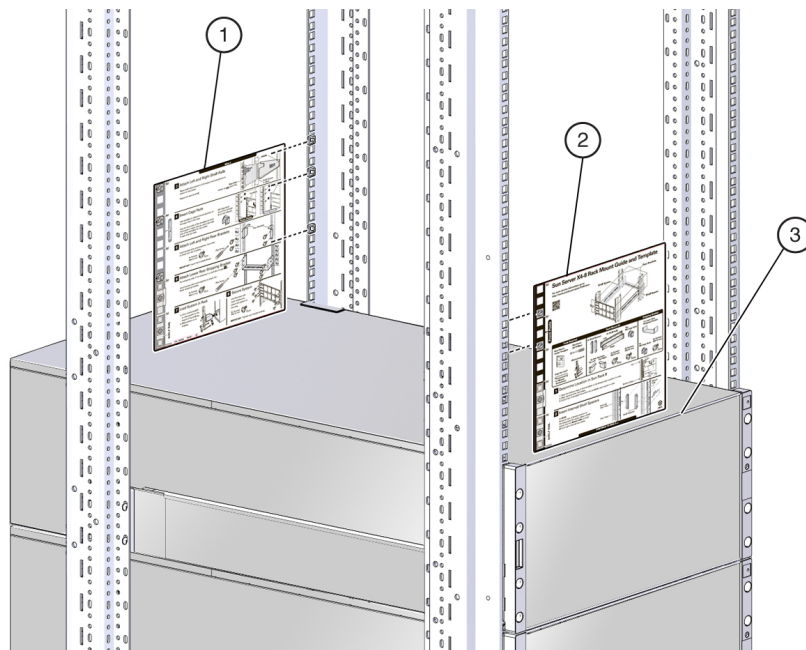


3. 四角穴ラックの場合、位置合わせテンプレート (2) で示された位置にケージナットを取り付けます。丸穴ラックの場合は、手順 4 に進みます。

- a. テンプレートをサーバーを設置する穴に合わせます。

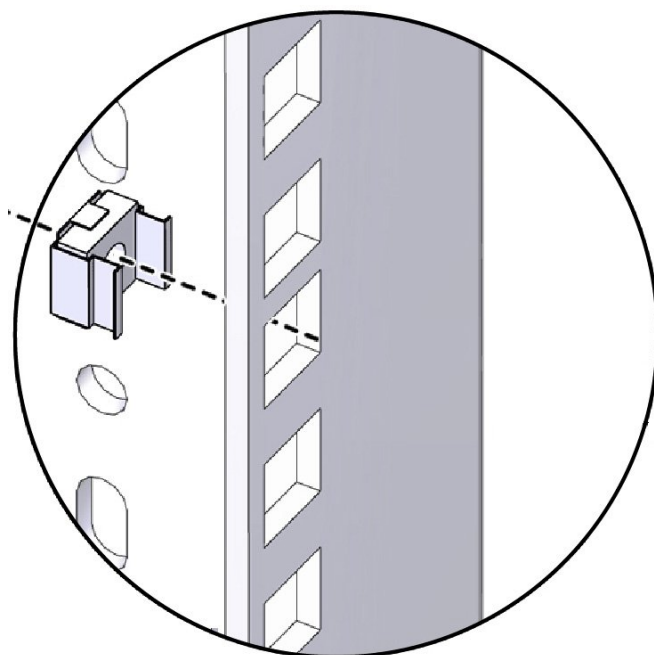
テンプレートには、背面ラック位置合わせ [1] と前面ラック位置合わせ [2] のいずれかのラック位置合わせの図があります。

サーバーは下のラックユニットのすぐ上に [3] 設置し、何も収容されないラックスペースを挟まないようにしてください。



b. テンプレートに明記された位置にケージナットを取り付けます。

ケージナットは各レールの内側に取り付けます。ケージナットは前面レールに 2 つずつ、背面レールに 3 つずつ取り付けます。

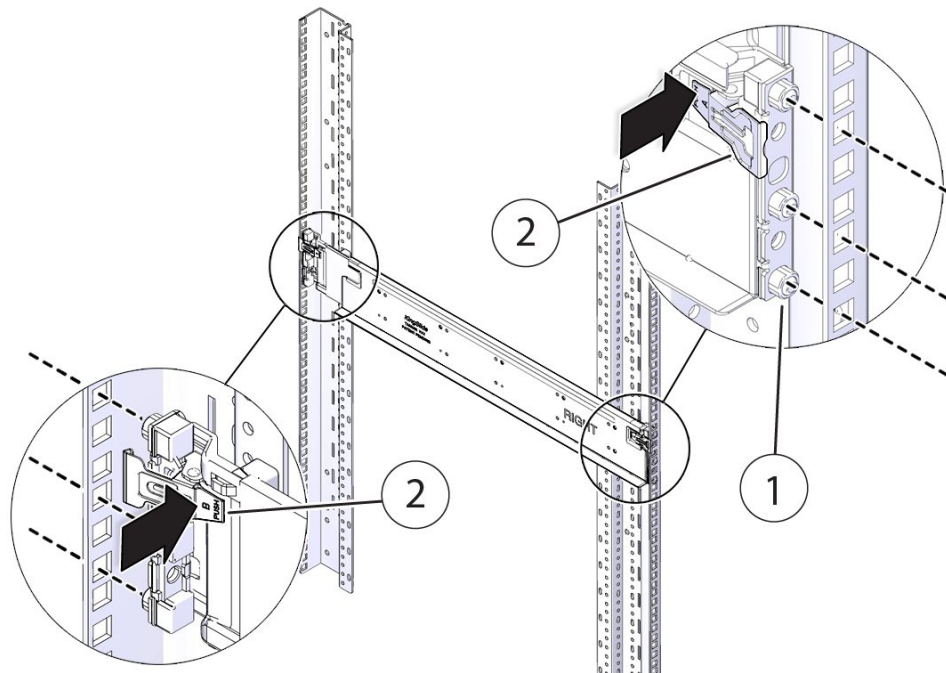


4. 左右のシェルフレールを取り付けます。

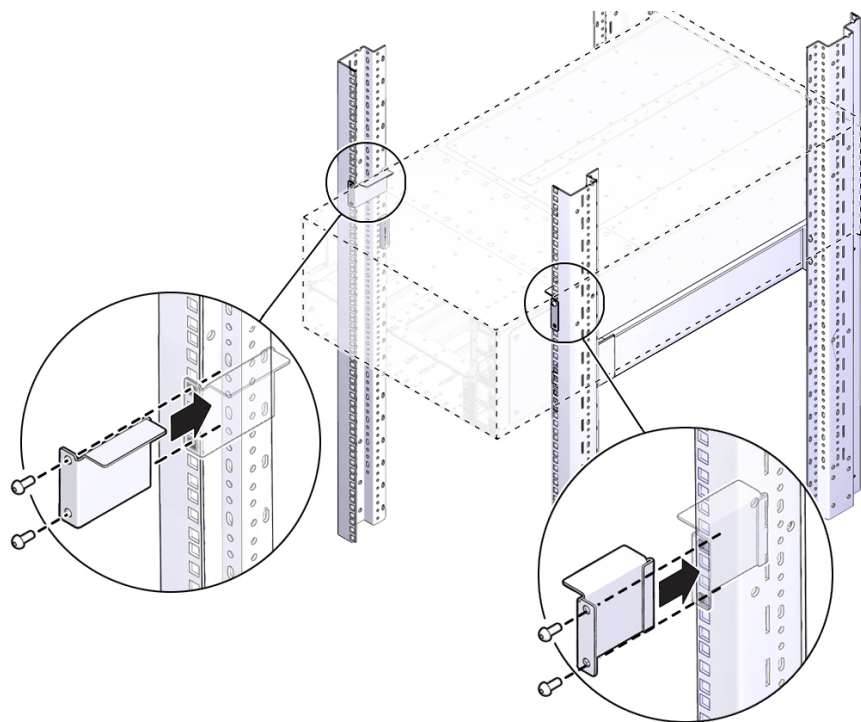
レールには、左、右、前面、背面のラベルが付いています。

レールの両端にはスタッドとラッチがあります。各レールで:

- a. ラックに合わせてレールを伸ばします。
- b. スタッドを [1] ラックの穴に挿入し、タブ [2] を押してラッチを開き、ラックに固定します。



5. 背面固定部品を取り付けます。
 - a. フランジがサーバー上面を覆うように各固定部品を合わせます。
 - b. 2つのねじを使用して、各固定部品をラックに固定します。
この時点ではねじを最後まで締めないでください。



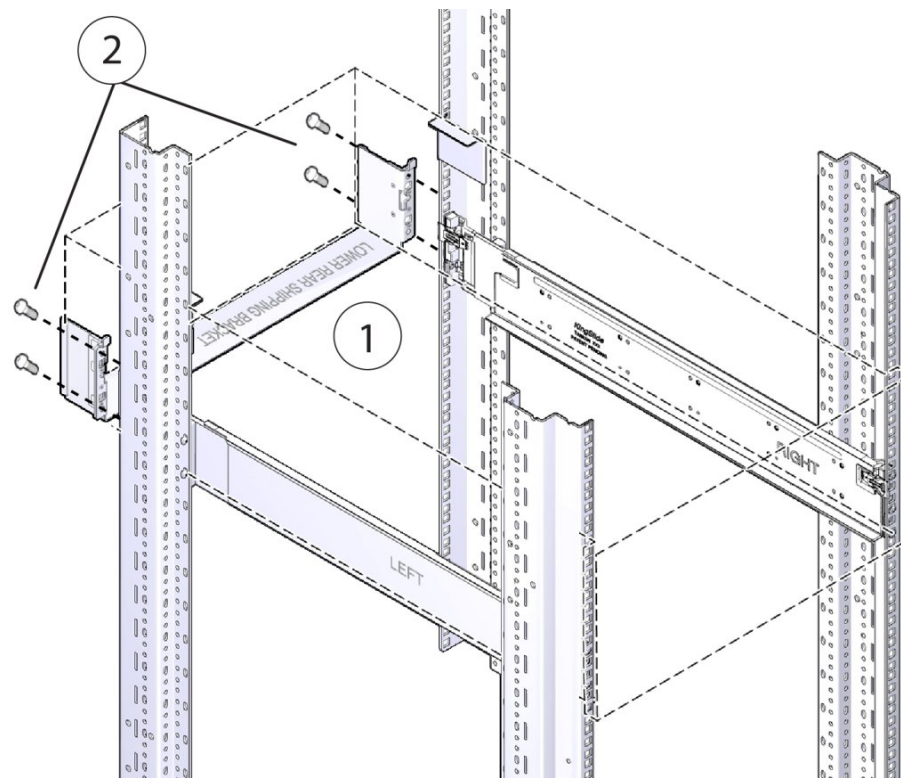
参照 43 ページの「サーバーをラックに取り付ける」

48 ページの「サーバーのケーブル接続」

▼ 出荷用留め具の取り付け (オプション)

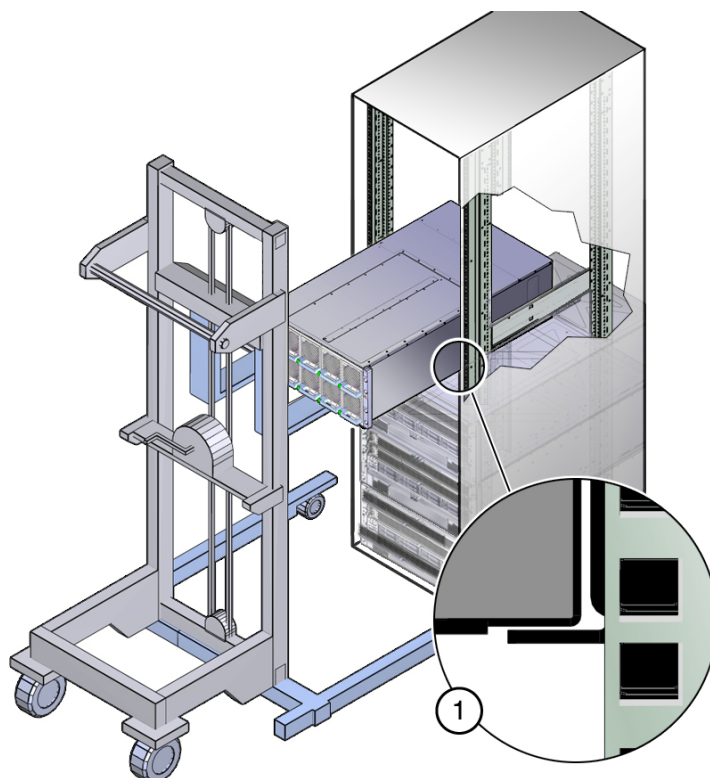
ラック内のサーバーを出荷する場合は、出荷用留め具を取り付けます。出荷用留め具はサーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

1. シェルフレール [1] のすぐ上に出荷用留め具を取り付けます。
出荷用留め具の水平方向の部分がシェルフレールの上に載るようにします。
2. 4 つの M6 ねじ [2] を使用してラックに固定します。



▼ サーバーをラックに取り付ける

1. リフトを使用してサーバーをラックの所定位置まで持ち上げます。



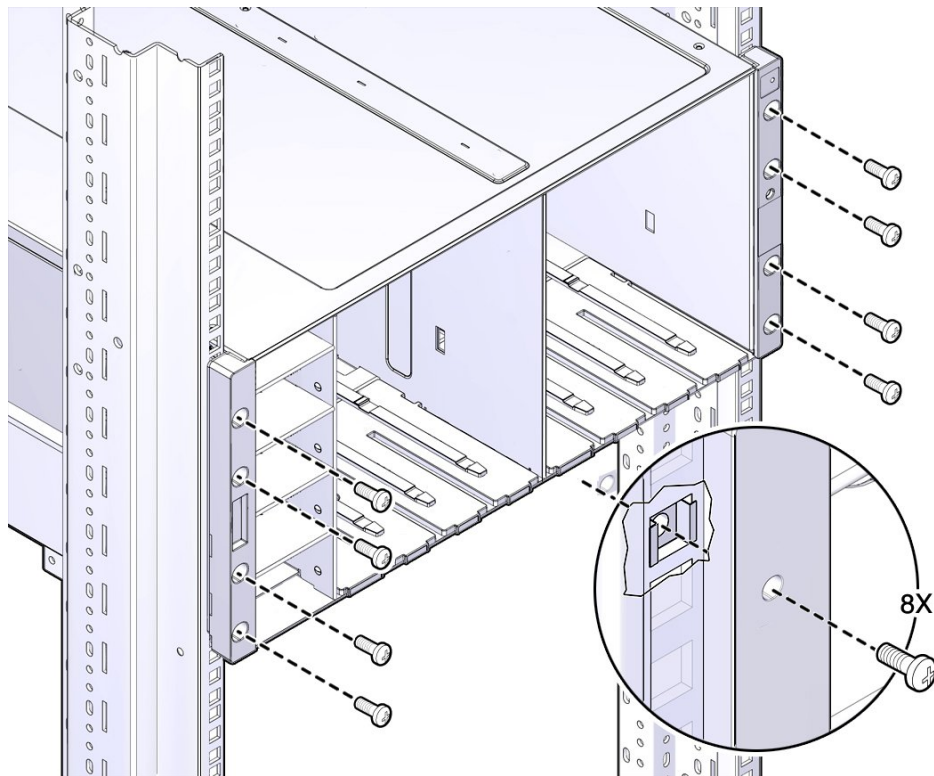
注意 - 人的傷害または装置が損傷する可能性があります。サーバーがレールでしっかり支えられたことを確認してから、サーバーをリフトから降ろしてください。

2. シェルフレールの所定の位置までサーバーをゆっくり押し込みます。

サーバーがシェルフレールで完全に支えられるまでは、リフトの支えを外さないでください。

3. 8つの M6 ねじを使用してサーバー前面をラックに取り付けます。

上 2 つのねじは、前の手順で取り付けたケージナットに合わせます。下のねじは、シェルフレールのねじ穴に合わせます。



4. 背面固定部品をサーバーに押し付けて、ねじを締めます。

参照 [37 ページの「シェルフレールと背面固定部品の取り付け」](#)

[48 ページの「サーバーのケーブル接続」](#)

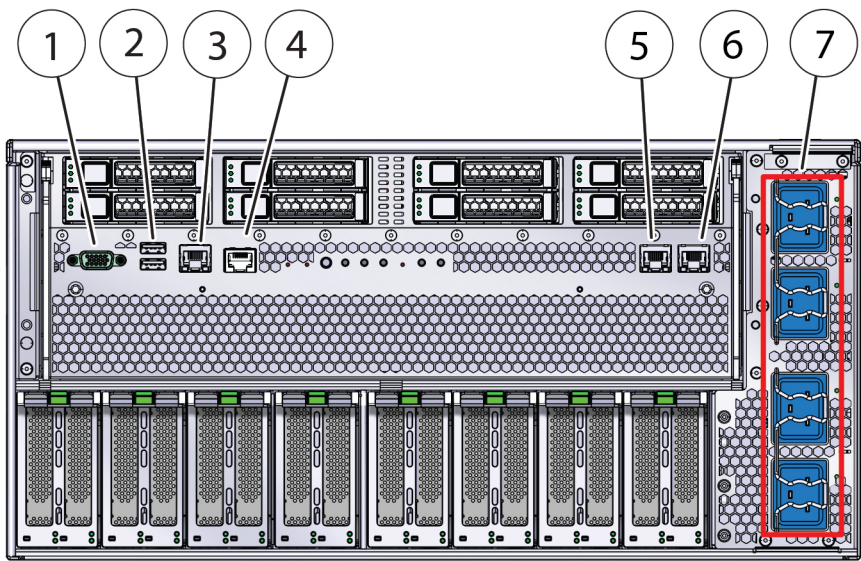
サーバーの配線

このセクションでは、はじめてケーブルを接続して電源を投入する方法について説明します。ここでは、次のトピックについて説明します。

説明	リンク
コネクタポートの場所を確認します。	47 ページの「バックパネルのコネクタとポート」
サーバーにデータケーブルを接続します。	48 ページの「サーバーのケーブル接続」
サーバーに電源コードを接続します。	48 ページの「サーバーのケーブル接続」

バックパネルのコネクタとポート

次の図に、サーバーのバックパネルのコネクタおよびポートの位置を示します。



吹き出し	説明
1	DB-15 ビデオポート
2	USB 2.0 ポート (2)
3	ネット管理ポート (NET MGT)
4	シリアル管理ポート (SER MGT)
5	Net 0 ポート
6	Net 1 ポート
7	電源コネクタ 0 - 3。200 - 240 VAC のみに接続します。

▼ サーバーのケーブル接続

次の順序で外部ケーブルをサーバーに接続します。

注記 - 括弧 [] 内の番号は、[47 ページの「バックパネルのコネクタとポート」](#)のバックパネルの図の吹き出しに対応しています。

1. 必要に応じて、Ethernet ケーブルを Gigabit Ethernet (NET) ポートに接続します [5-6]。
2. (オプション) システムコンソールで直接対話する場合は、マウスやキーボードなどの外部デバイスをサーバーの USB ポート [2] に、モニターを DB-15 ビデオポート [1] に接続します。
3. ネットワーク経由で Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続する場合は、Ethernet ケーブルを NET MGT [3] とラベル付けされた Ethernet ポートに接続します。

注記 - サービスプロセッサ (SP) は、デフォルトで NET MGT (帯域外) ポートを使用します。代わりに、SP がサーバーの 2 つの 10/100/1000 Ethernet ポートのいずれかを使用するように構成できます。

4. シリアル管理ポートを使用して Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にアクセスするには、シリアルヌルモデムケーブルを SER MGT [4] と書かれた RJ-45 シリアルポートに接続します。

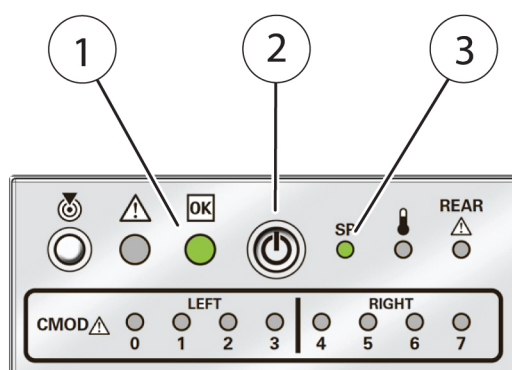
シリアルコンソールからのシステム出力の表示の詳細は、[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。

5. 接地済みの 4 本のサーバー電源コードを、異なる回路上の接地済み 200-240V コンセントに接続します。
6. サーバー電源コードをサーバーのバックパネルの AC コネクタに接続し、コネクタのケーブルクリップ [7] を使用して固定します。

電源障害時の冗長性確保およびブレーカー切断を防ぐため、上 2 つの電源コードと下 2 つの電源コードは異なる回路に接続してください。

電源が接続されると、SP はブートしてスタンバイ電源モードに入ります。

- Oracle ILOM が起動するときに SP OK/障害インジケータ [3] が点滅し、Oracle ILOM のシステムログインの準備ができるまで、主電源/OK インジケータ [1] は点灯しません。
- 数分後に主電源/OK インジケータがスタンバイ点滅パターンで点滅 (3 秒ごとに短く点滅) し、SP が使用できる状態であることを示します。この時点では、ホストは初期化されておらず、電源も入っていません。



吹き出し	説明
1	主電源/OK インジケータ
2	埋め込み式の電源ボタン
3	SP OK インジケータ

参照 [「システム電源の制御」](#)

[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

Oracle ILOM への接続

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーコンポーネントのモニターと管理に使用できる組み込みのツールです。Oracle ILOM を使用して、次のタスクを実行できます。

- ホストの電源投入や電源切断を含め、サーバーをローカルまたはリモートで管理します
- 重要なシステム情報のモニター、記録されたイベントの表示、通知の取得、トラブルシューティングツールを実行します
- サーバーハードウェア構成を表示および編集します
- 会社のセキュアなインフラストラクチャーを使用して Oracle ILOM ユーザーアカウントを管理します
- ホストコンソールにリモートでアクセスします
- Oracle ILOM およびサーバーの BIOS 構成情報をバックアップします

このセクションでは、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI)、または Web インタフェースを構成およびアクセスして、サーバーを管理する方法について説明します。

説明	リンク
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェースについて学習します。	52 ページの「Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース」
ネットワークポートとデフォルト値について学習します。	52 ページの「Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値」
シリアルポートに接続された端末を使用して Oracle ILOM に直接ログインします。	53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
Ethernet 接続を使用してネットワーク経由で Oracle ILOM にログインします。	54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
Oracle ILOM ネットワーク設定を構成します。	■ 56 ページの「Oracle ILOM CLI での IPv4 ネットワーク設定の変更」 ■ 61 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更」 ■ 63 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」

説明	リンク
	■ 64 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」
Oracle ILOM を終了します。	65 ページの「Oracle ILOM の終了」
サービスプロセッサ接続をトラブルシューティングします。	65 ページの「サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング」

関連情報

- 69 ページの「Oracle System Assistant の起動」
- Oracle ILOM の詳細な使用手順については、サポートされている Oracle ILOM のバージョンのドキュメントを参照してください (サポートされているバージョンは**プロダクトノート**にリストされています): <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>

Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース

次の表に、Oracle ILOM のコンポーネントと機能を示します。

コンポーネント	機能
ハードウェア	■ ファン、ストレージドライブ、電源装置など、各コンポーネントのステータスと構成をモニターする組み込みのサービスプロセッサ (SP) チップセット。 ■ バックパネルの 2 つの外部接続: NET MGT ポート Ethernet 接続、および SER MGT RJ-45 シリアル管理ポート。17 ページの「バックパネルの機能」を参照してください。
インタフェース	■ Web ブラウザのインタフェース ■ SSH コマンド行インタフェース (CLI) ■ IPMI v2.0 CLI ■ SNMP v3 インタフェース

Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値

Sun Server X4-8 は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作することを可能にする IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定をサポートしています。

- IPv4 構成の場合、DHCP がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てます。

- IPv6 構成の場合、IPv6 ステートレス自動設定がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てます。通常の構成では、サーバーは DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターが割り当てる設定を受け入れます。

注記 - DHCP サーバーによって割り当てられた IP アドレスまたはホスト名を確認するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

このセクションの手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立できます。

関連項目:

- [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順では、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要はありません。管理者権限を使用して Oracle ILOM アカウントにログインする必要があります。

注記 - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root で、パスワードは changeme です。このデフォルトアカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

1. サーバーの SER MGT ポートを介したシリアルコンソール接続がセキュアで、正しく動作していることを確認します。
2. 次のシリアル通信設定が構成されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアフロー制御を無効化 (CTS/RTS)
3. Enter キーを押して、シリアルコンソールと Oracle ILOM の間の接続を確立します。

Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。

4. **管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。**

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、Oracle ILOM に表示されます。

▼ リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順を実行するには、管理者権限を持つ Oracle ILOM アカウントへのログインと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を把握しておく必要があります。コマンド行インタフェース (CLI) または Web インタフェースを使用してログインする手順を、次で説明します。

注記 - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは `root` で、パスワードは `changeme` です。このデフォルトアカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

1. **Oracle ILOM への接続を確立します。**
 - **コマンド行インタフェース (CLI):** セキュアなシェルセッションを開始します。次のように入力します。


```
ssh username@host
```

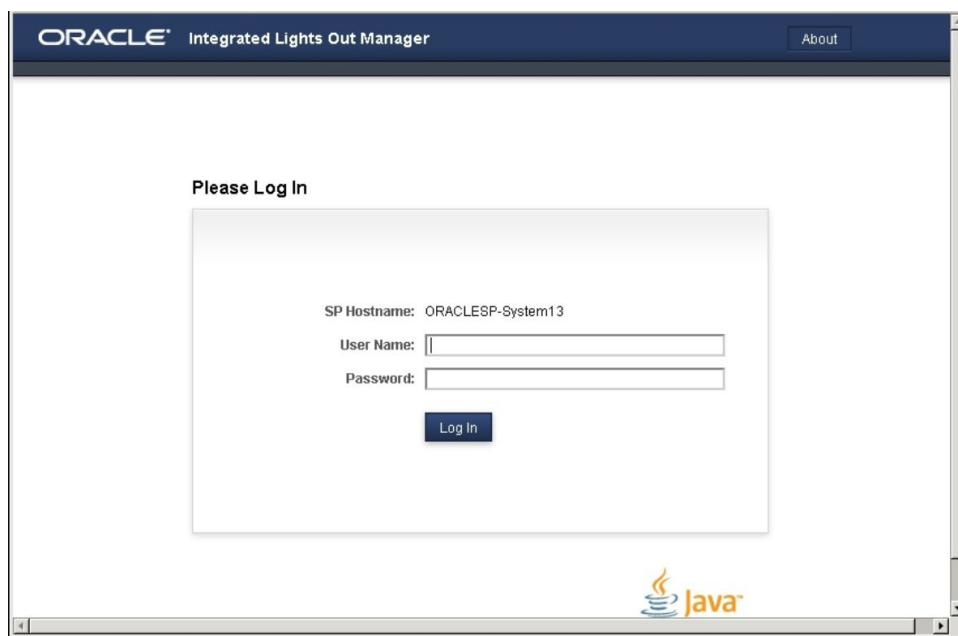

ここで、*username* は管理者権限を持つアカウントのユーザー名、*host* はサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) のいずれかです。

パスワードの入力を求める Oracle ILOM のプロンプトが表示されます。

Password:

■ **Web インタフェース:** Web ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの IP アドレスを入力して、Enter を押します。

Oracle ILOM ログイン画面が表示されます。



2. Oracle ILOM にログインします。

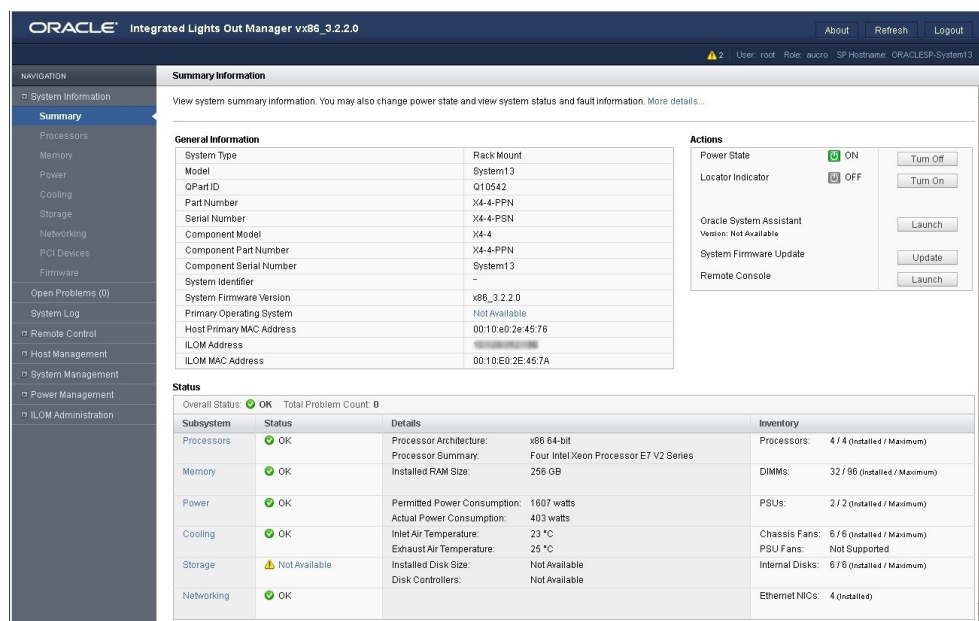
- CLI: Oracle ILOM パスワードプロンプトで、パスワードを入力して Enter を押します。例:

Password: **changeme**

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が、Oracle ILOM に表示されます。

- Web インタフェース: Oracle ILOM ログイン画面で、ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。

Oracle ILOM へのログインに成功したことを示す「Summary」画面が表示されます。例:



▼ Oracle ILOM CLI での IPv4 ネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI を使用してサーバーの IPv4 ネットワーク設定を変更するには、この手順を使用します。

IPv6 ネットワーク設定を変更するには、[58 ページの「Oracle ILOM CLI での IPv6 ネットワーク設定の変更」](#)を参照してください。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順は、『[Sun Server X4-8 サービスマニュアル](#)』を参照してください。

1. Oracle ILOM CLI にログインします。参照先:

- [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)
- [54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定したときに接続が終了します。これが発生した場合は、新しい設定を使用して再度ログインします。

2. **cd** コマンドを使用して、/SP/network ディレクトリに移動します。

-> **cd /SP/network**

3. 次のいずれかを実行します。

- ネットワーク上に DHCP サーバーがある場合、次のコマンドを入力し、DHCP サーバーがサーバーに割り当てた設定を表示します。

-> **show /SP/network**

- DHCP サーバーがない場合、または設定を割り当てる場合、set コマンドを使用し、次の表にあるプロパティの値を割り当てます。例:

-> **set /SP/network/ pendingipdiscovery=static**

-> **set /SP/network/ pendingipaddress=192.168.183.106**

-> **set /SP/network/ pendingipnetmask=255.255.255.0**

-> **set /SP/network/ pendingipgateway=192.168.183.254**

-> **set /SP/network/ commitpending=true**

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	ネットワークの状態はデフォルトで enabled に設定されています。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的ネットワーク構成を有効にするには、pendingipdiscovery を static に設定します。 デフォルトでは、pendingipdiscovery は dhcp に設定されています。
pendingipaddress	set pendingipaddress=<ip_address>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して、set コマンドに続けて pending コマ
pendingipnetmask	pendingipnetmask=<netmask>	
pendingipgateway	pendingipgateway=<gateway>	

プロパティ	プロパティの設定値	説明
		ンドを入力したあと、割り当てる静的な値を入力します。
commitpending	set commitpending=true	set commitpending=true と入力し、変更をコミットします。

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定したときに接続が終了します。これが発生した場合は、新しい設定を使用して再度ログインします。

4. ネットワークテストツール (Ping) を使用して、Oracle ILOM から IPv4 ネットワーク構成をテストします。

詳細は、[63 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ Oracle ILOM CLI での IPv6 ネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI を使用してサーバーの IPv6 ネットワーク設定を変更するには、この手順を使用します。

IPv4 ネットワーク設定を変更するには、[56 ページの「Oracle ILOM CLI での IPv4 ネットワーク設定の変更」](#)を参照してください。

注記 - BIOS 設定ユーティリティーを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順は、『*Sun Server X4-8 サービスマニュアル*』を参照してください。

1. Oracle ILOM CLI にログインします。参照先:

■ [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

■ [54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定の変更後に接続が終了します。新しい設定を使用して再度ログインする必要があります。

2. cd コマンドを使用して、SP/network/ipv6 ディレクトリに移動します。

```
-> cd SP/network/ipv6
```

3. **show** コマンドを入力して、デバイスで構成された IPv6 ネットワーク設定を表示します。

例:

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
state = enabled
autoconfig = stateless
dhcpv6_server_duid = (none)
link_local_ipaddress = 2001:db8:214:4fff:feca:5f7e/64
static_ipaddress = ::/128
ipgateway = 2001:db8:211:5dff:febe:5000/128
pending_static_ipaddress = ::/128
dynamic_ipaddress_1 2001:db8:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

Commands:
cd
show
```

4. IPv6 自動構成オプションを構成するには、**set** コマンドを使用して、次の自動構成プロパティの値を指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動構成オプションを有効にするには、この state が enabled に構成されている必要があります。
autoconfig	set autoconfig= <value>	このコマンドには、設定する autoconfig の値を指定します。 次のオプションがあります。 ■ stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。 ■ dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから取得した DNS 情報を自動的に割り当てます。dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから取得した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ disable

プロパティ	プロパティの設定値	説明
		自動構成プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。

注記 - IPv6 構成オプションは、設定後に有効になります。

注記 - `dhcpcv6_stateless` オプションを有効にした状態、または `dhcpcv6_stateful` オプションを有効にした状態で、`stateless` 自動構成オプションの実行を有効にできます。ただし、`dhcpcv6_stateless` 自動構成オプションと `dhcpcv6_stateful` 自動構成オプションを同時に有効にしないでください。

5. 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を実行します。

a. 次のプロパティタイプを指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
<code>state</code>	<code>set state=enabled</code>	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで <code>enabled</code> になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を <code>enabled</code> に設定する必要があります。
<code>pendingipaddress</code>	<code>set pending_static_ipaddress = <ipv6_address> / <subnet mask length in bits></code>	このコマンドには、プロパティ値として、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクを指定します。IPv6 アドレスの例: <code>fec0:a:8:b7:214:4f ff:feca:5f7e/64</code>

b. 次のコマンドを入力して、保留中の IPv6 静的ネットワークパラメータを確定します。

```
-> set commitpending=true
```

注記 - ネットワーク設定は、確定するまで保留されます。サーバーに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、サーバーとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成します。

6. ネットワークテストツール (Ping6) を使用して、Oracle ILOM から IPv6 ネットワーク構成をテストします。

詳細は、[63 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM Web インタフェースから、現在構成されているサーバーのネットワーク設定を変更するには、次の手順に従います。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順は、『*Sun Server X4-8 サービスマニュアル*』を参照してください。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。**
[54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。
2. **左側のナビゲーションツリーから、「ILOM Administration」>「Connectivity」と選択します。**
「Network Settings」画面が表示されます。Oracle ILOM はデバイスに構成した設定が表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager vx86_3.2.2.0

NAVIGATION

- System Information
 - Summary
 - Processors
 - Memory
 - Power
 - Cooling
 - Storage
 - Networking
 - PCI Devices
 - Firmware
- Open Problems (0)
- System Log
- Remote Control
- Host Management
- System Management
- Power Management
- ILOM Administration
 - Identification
 - Logs
 - Management Access
 - User Management
 - Connectivity**
 - Configuration Management
 - Notifications
 - Date and Time
 - Maintenance

Connectivity

Network DNS Serial Port

View the MAC address and configure network settings for the Service Processor from this page. DHCP is the default mode, but you can manually configure a static IP Address, Gateway. You may also select which port you wish to use for managing this Service Processor. More details...

General Settings Dynamic Address Local Host Interconnect Network Tools

General Settings

State: ☒ Enabled

MAC Address: 00:10:E0:2E:45:7A

Out of Band MAC Address: 00:10:E0:2E:45:7A

Sideband MAC Address: 00:10:E0:2E:45:7B

Management Port: MGMT

802.1Q Tagging: ☐ Enabled

VLAN ID:

The valid range is from 1-4079. The default is: Disabled

Responding DHCP Server:

IPv4

IP Discovery Mode: ☒ DHCP ☐ Static

DHCP Client ID: None

SysID is the System Identifier configured on the Identification Information page.

IP Address:

Netmask: 255.255.255.0

Gateway:

IPv6

State: ☒ Enabled

Autoconfig: ☒ Stateless ☐ None

DHCPv6 Autoconfig: ☐ Stateless ☐ Stateful ☒ None

3. 使用しているネットワーク環境に当てはまるネットワーク構成手順を実行します。

■ IPv4:

- ネットワーク上の DHCP サーバーにネットワーク設定の割り当てを許可するには、「DHCP」ラジオボタンが選択されていることを確認して、「Save」をクリックします。
- ネットワーク設定を割り当てるには、「Static」ラジオボタンを選択して、「IP Address」、「Netmask」、および「Gateway」フィールドに入力します。次に「Save」をクリックします。

■ IPv6:

- 自動構成オプションを構成するには、「State」プロパティの横にある「Enabled」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、自動構成値を選択して「Save」をクリックします。
- 静的 IPv6 アドレスを設定するには、「State」プロパティの横にある「Enabled」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、*ipv6_address/subnet mask length in bits* の値を「Static IP Address」フィールドに入力して、「Save」をクリックします。

注記 - DHCPv6 Autoconfig Stateless オプションを有効にした状態、または DHCPv6 Autoconfig Stateful オプションを有効にした状態で、Autoconfig Stateless オプションの実行を有効にできます。

4. ネットワークテストツール (Ping および Ping 6) を使用して、Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。

詳細は、[63 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. CLI プロンプトで **show** コマンドを入力して、ネットワークの **test** ターゲットとプロパティを表示します。

たとえば、次の出力は、test ターゲットプロパティを示しています。

```
-> show
/SP/network/test
Targets:

Properties:
ping = (Cannot show property)
ping6 = (Cannot show property)

Commands:
cd
set
show
```

2. **set ping** または **set ping6** コマンドを使用して、ネットワークテストをデバイスから次の表に示すネットワーク宛先に送信します。

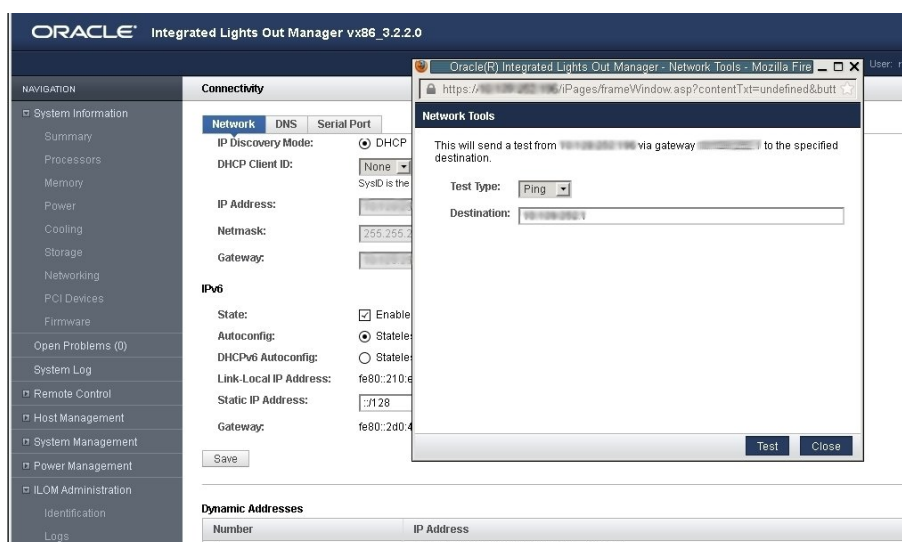
プロパティ	プロパティの設定値	説明
ping	set ping=<IPv4_address>	コマンドプロンプトで set ping= コマンドを入力し、続けて IPv4 テストの宛先アドレスを入力します。例:-> set ping=192.168.10.106 Ping of 192.168.10.106 succeeded
ping6	set ping6= <IPv6_address>	set ping6= コマンドのあとに、IPv6 テストの宛先アドレスを入力します。例:-> set ping6=2001::db8:5dff:febe:5000

プロパティ	プロパティの設定値	説明
		Ping of 2001::db8:5dff:febe:5000 succeeded

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. 「ILOM Administration」>「Connectivity」画面で、画面最下部の「Tools」ボタンをクリックします。

「Network Configuration Test」画面が表示されます。



2. 「Test Type」リストボックスから「Ping」または「Ping6」を選択します。

IPv4 ネットワーク構成用の Ping テストを選択します。IPv6 ネットワーク構成用の Ping6 テストを選択します。

3. IPv4 または IPv6 テストの宛先アドレスを「Destination」フィールドに入力して、「Test」をクリックします。

テストに成功すると、「Network Configuration Test」画面の「Destination」フィールドの下に「Ping of ip_address succeeded」というメッセージが表示されます。

▼ Oracle ILOM の終了

- Oracle ILOM セッションを終了するには:
 - Oracle ILOM CLI の CLI プロンプトで、**exit** と入力します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、画面の右上隅にある「Log Out」ボタンをクリックします。

サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング

このセクションでは、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) に関して発生する可能性のある次の 2 つの問題の対処方法を示します。

- Oracle ILOM SP が応答しなくなり、リセットが必要になる。
- システム管理者が root アカウントのパスワードを忘れてしまったため、復旧する必要がある。

これらの問題の対処手順については、次の各セクションを参照してください。

- [65 ページの「Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット」](#)
- [66 ページの「SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット」](#)
- [66 ページの「root アカウントのパスワードの回復」](#)

▼ Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット

- Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) がハングアップした場合は、次のいずれかの方法を使用してそれをリセットします。
 - Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) から、**reset /SP** コマンドを入力します
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、
「Administration」>「Maintenance」>「Reset SP」の順にクリックします。

注記 - Oracle ILOM SP をリセットすると、現在の Oracle ILOM セッションが切断されます。Oracle ILOM での作業を続けるには、再度ログインする必要があります。

▼ SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット

Oracle ILOM SP がハングアップして、Oracle ILOM の Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI コマンドを使用してリセットできない場合は、この手順を使用します。

- **Oracle ILOM のリセットスイッチを使用して、Oracle ILOM SP を手動でリセットします。**

SP リセットスイッチの位置については、[17 ページの「バックパネルの機能」](#)を参照してください。

▼ root アカウントのパスワードの回復

必要な場合、システム管理者は、事前構成された Oracle ILOM のデフォルトのパスワードを使用して、事前構成された Oracle ILOM のローカルの root アカウントまたはローカルの root アカウントのパスワードを回復できます。

root アカウントのパスワードを回復するには、Oracle ILOM に対するローカルのシリアル管理ポート (SER MGT) 接続が必要です。また、Oracle ILOM で Physical Presence State が有効になっている場合 (デフォルト)、ユーザーは自分がサーバーの前にいることを証明する必要があります。

root アカウントのパスワードを回復するには、これらの手順を実行します。

1. **Oracle ILOM に対してローカルのシリアル管理接続を確立し、デフォルトのユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインします。例:**

```
SUNSP-000000000 login: default
```

```
Press and release the physical presence button
```

```
Press return when this is completed...
```

2. **サーバーの前に自分がいることを証明します。**

サーバーの前に自分がいることを証明するには、サーバー前面のロケータボタンを押します。

ロケータボタンの位置については、[13 ページの「フロントパネルの機能」](#)を参照してください。

3. **シリアルコンソールに戻り、Enter キーを押します。**

パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。

4. デフォルトユーザーアカウントのパスワード **defaultpassword** を入力します
5. アカウントのパスワードをリセットするか、root アカウントを作成し直します。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

このセクションでは、Oracle System Assistant の起動、Oracle System Assistant の使用準備、およびオペレーティングシステムのインストールに向けたサーバー準備の手順を示します。

説明	リンク
Oracle System Assistant の起動	69 ページの「Oracle System Assistant の起動」
Oracle System Assistant のネットワークインタフェースを使用できる状態に構成します。 注記 - これは、Oracle System Assistant を最初に開くときに 1 度だけ必要な作業です。	73 ページの「Oracle System Assistant の準備」
オペレーティングシステムのインストール前に実行する必要があるタスクのリストを完了します。	74 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」

Oracle System Assistant の起動

このセクションでは Oracle System Assistant を起動する方法について説明します。

Oracle System Assistant はシステムのソフトウェアとファームウェアの設定に適したアプリケーションです。Oracle System Assistant は、ほとんどの Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うための組み込みのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Linux、Oracle VM、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

説明	リンク
Oracle ILOM から Oracle System Assistant をリモートで起動します。	70 ページの「Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する」

説明	リンク
Oracle System Assistant をローカルで起動します。	72 ページの「Oracle System Assistant をローカルで起動する」

関連項目

- Oracle System Assistant の詳細は、『[Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド \(http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs\)](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』を参照してください。

▼ Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する

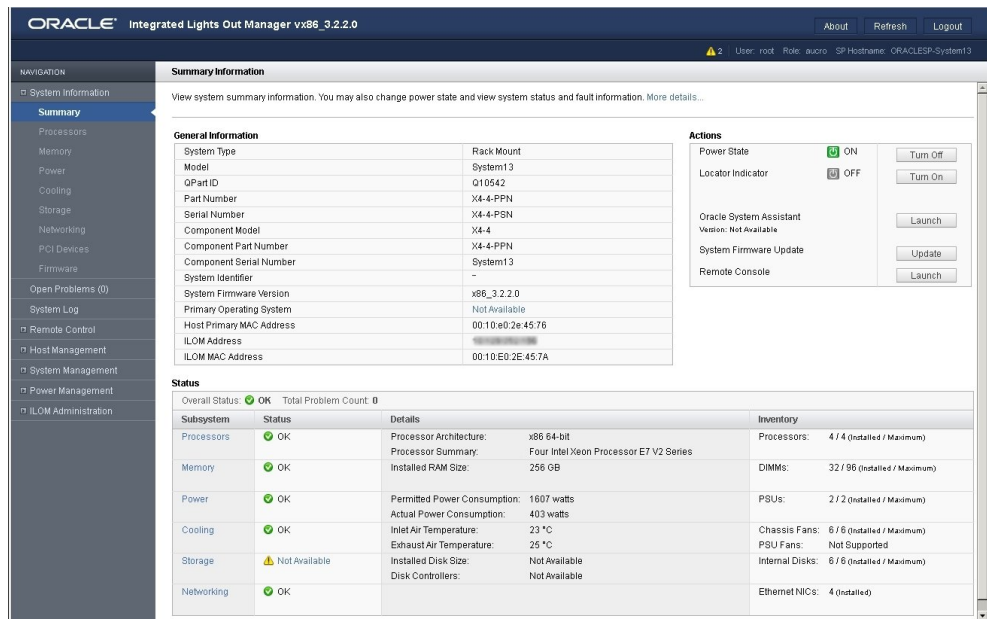
1. サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。

サーバーがスタンバイ電源モードの場合は、サービスプロセッサの OK インジケータがオンになり、電源/OK インジケータがゆっくり点滅します。これらのインジケータの位置については、[13 ページの「フロントパネルの機能」](#)を参照してください。

2. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの SP の IP アドレスを入力します。Oracle ILOM のネットワークアクセスを設定していない場合は、『[Oracle ILOM への接続](#)』を参照してください。

「System Summary」画面が表示されます。



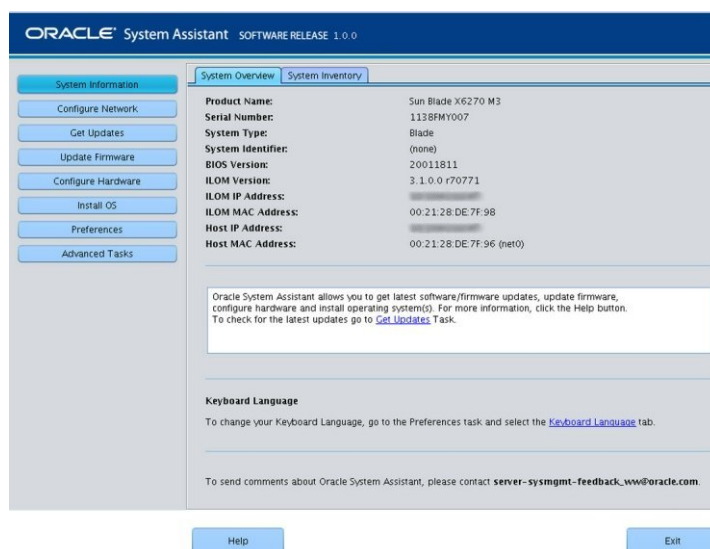
3. 右上パネルにある Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。

Oracle System Assistant を起動する際、サーバーがスタンバイ電源モードではなくフル電源になっている場合、最初にホストをシャットダウンするよう求められます。147 ページの「Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する」を参照してください。ホストの電源が切断されてから、この手順を続行してください。

4. Oracle System Assistant の起動を続行するには、「Yes」をクリックします。

サーバーがブートします。これには数分かかる場合があります。

- サーバーの電源が投入されます。
- Oracle System Assistant アプリケーションがブートします。
- Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



参照 ■ 75 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」

▼ Oracle System Assistant をローカルで起動する

Oracle System Assistant をローカルで起動するには、物理的なサーバーの前で、VGA モニター、USB キーボード、および USB マウスにアクセスできる必要があります。

1. サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。

電源/OK インジケータがゆっくり点滅していることを確認します。[13 ページの「フロントパネルの機能」](#)を参照してください。

2. サーバーにローカル接続します。

[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。

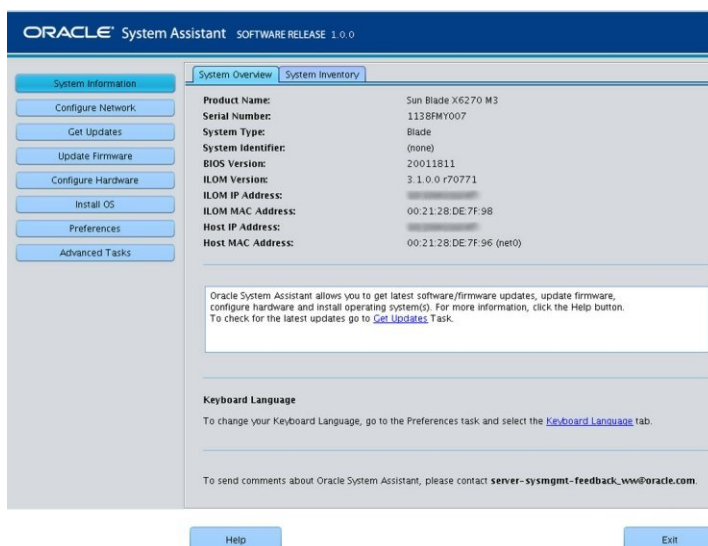
3. フロントパネルの電源ボタンを押して離し、サーバーをフル電源モードにします。

サーバーがブートし、モニターに POST メッセージが表示されます。

4. Oracle System Assistant の POST メッセージが表示されたら、F9 ファンクションキーを押します。



Oracle System Assistant がブートして Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



参照 ■ [75 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」](#)

▼ Oracle System Assistant の準備

このセクションでは、Oracle System Assistant を使用できるようにネットワーク接続を設定する方法について説明します。

Oracle System Assistant が起動すると、Net 0 上で DHCP への接続が試行されます。

- Net 0 が DHCP に対応したネットワークに接続されている場合は、処理が成功します。これ以上の構成は必要ありません。
- Net 0 が DHCP 非対応ネットワークに接続されている場合は、ネットワーク接続を構成する必要があります。

通常これらの設定が必要になるのは、Oracle System Assistant の初回使用時のみです。

1. [69 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)の説明のとおり、Oracle System Assistant を起動します。
2. 「Network Configuration」タブを選択します。
3. ネットワーク構成の詳細を入力します。

詳細は、[Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド \(http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs\)](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs) のネットワークインターフェース設定を構成する (Oracle System Assistant) に関する項を参照してください。

OS インストールのためのサーバーの準備

このセクションでは、オペレーティングシステムインストールに向けてサーバーを準備する方法について説明します。

オペレーティングシステムをインストールする前にはさまざまなタスクを実行する必要があります。これらには次が含まれます。

- ファームウェアおよびソフトウェアの更新の入手
- ファームウェアの更新のインストール
- Oracle ILOM のネットワークアドレスの構成
- RAID の構成

これらが完了したら、オペレーティングシステムをインストールできます。

これらは、Oracle System Assistant やその他の方法を使用して実行できます。Oracle System Assistant の使用をお勧めします。

- Oracle System Assistant を使用するには、[75 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」](#)を参照してください。

- ほかの方法で OS をインストールする場合のサーバーの準備については、次を参照してください。

『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)

注記 - Oracle Solaris インストールの場合、Oracle System Assistant は推奨されるドライバやツールをインストールしません。Linux、Oracle VM、および Windows の場合、Oracle System Assistant は推奨されるドライバやツールのうち、その特定のオペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアでサポートされているものをインストールします。Oracle System Assistant を使ってオペレーティングシステムをインストールする際のインストール可能なオプションソフトウェアの一覧については、Oracle System Assistant の ReadMe を参照してください。

関連情報

- [69 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)
- [75 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」](#)

▼ OS インストールのためのサーバーの準備

1. [69 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)の説明のとおり、Oracle System Assistant を起動します。
2. Oracle System Assistant を使用して、次の表に示したタスクを実行します。

Oracle System Assistant の詳細は、『[Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』または Oracle System Assistant の組み込みのヘルプを参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面	詳細情報
1	Oracle System Assistant ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration	73 ページの「Oracle System Assistant の準備」
2	Oracle System Assistant で使用される最新のソフトウェアとファームウェアの更新を入手します。	Get Updates	「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクステンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。入手可能なサポートされている最新の BIOS およびファームウェアのバージョンを使用することをお勧めします。	Update Firmware	142 ページの「更新のインストール」

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面	詳細情報
4	Oracle ILOM を構成します。これはサービスプロセッサにアクセスするための準備を支援します。	「Configure Hardware」>「Service Processor Configuration」	「Oracle ILOM への接続」 これはすでに完了している場合があります。
5	RAID を構成します。Oracle System Assistant RAID 構成ユーティリティーはディスクにボリュームを作成するために使用されます。ボリュームは OS 用に使用したり、RAID セットに含めたりすることができます。 注意 - データ損失。インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	「Configure Hardware」>「RAID Configuration」	79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」 。
6	Oracle System Assistant の「Install OS」ウィザードを使用して、オペレーティングシステムをインストールします。サポートされているオペレーティングシステムには、Oracle Solaris、Linux、Windows、または Oracle VM ソフトウェアが含まれます。 注意 - データ損失。インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	Install OS	詳細は、オペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

OS インストールのためのストレージドライブの構成

このセクションでは、オペレーティングシステムのインストール用のサーバーブートディスクの構成および RAID の構成方法について説明します。

説明	リンク
ストレージドライブ構成オプションについて学習します。サポートされるオプションは、サーバーのホストバスアダプタ (HBA) およびインストール済みの OS があるかどうかによって異なります。	77 ページの「ストレージドライブ構成」
Oracle System Assistant を使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」
オペレーティングシステムインストールと更新タスクについて学習します。	113 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

関連項目

- ホストバスアダプタ (HBA) のドキュメントコレクション (<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/oracle-storage-networking-190061.html>)

ストレージドライブ構成

次の段落では、ストレージドライブの構成に必要なツールと条件を説明します。

インストール済みのオペレーティングシステム: インストール済みのオペレーティングシステムは RAID 構成をサポートしていないため、インストール済みのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアを使用する場合は、サーバーのストレージドライブで RAID を構成することはできません。この場合は、次のセクション内のいずれかに進みます。

- 「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
- 「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」
- 「インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成」

ホストアダプタのタイプ (HBA): 2 種類の SAS-2 HBA がサポートされています。

- *Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z)*: この HBA では RAID はオプションです。
- *Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z)*: この HBA では RAID の構成が必要になります。RAID アレイを使用しない場合は、単一のストレージドライブで RAID 0 ボリューム (「仮想ディスク」とも呼ばれます) を構成して、そのボリュームをブート可能にします。

RAID 構成ツール: どちらのタイプの HBA でも、Oracle System Assistant (推奨) または BIOS RAID 構成ユーティリティのいずれかを使用して RAID を構成できます。

オペレーティングシステムをインストールしたら、サーバーに付属のサポートされている OS ベースの RAID 管理ユーティリティを使用して RAID ストレージドライブを管理できます。

新しい OS のインストール: 次の表は、新しいオペレーティングシステムをインストールするときの RAID ボリューム構成の条件を一覧しています。

構成のタイプ	HBA タイプ	リンク
RAID	サポートされているいずれかの HBA	Oracle System Assistant を使用するには、79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」を参照してください BIOS 構成ユーティリティを使用するには、97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」を参照してください
RAID なし 単一のストレージドライブで RAID 0 ボリューム (「仮想ディスク」とも呼ばれます) を構成して、そのボリュームをブート可能にします。	Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z)	Oracle System Assistant を使用するには、88 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」を参照してください BIOS 構成ユーティリティを使用するには、100 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成」を参照してください
RAID なし	Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z)	ご使用のオペレーティングシステムのインストールドキュメントを参照してください。 ■ 『Sun Server X4-8 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』

構成のタイプ	HBA タイプ	リンク
		■ 『Sun Server X4-8 Oracle VM インストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-8 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-8 Microsoft Windows オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-8 VMware ESXi インストールガイド』 注記 - この構成では RAID ボリュームを構成する必要はありません。

Oracle System Assistant を使用した RAID の構成

Oracle System Assistant を使用して、サーバー上に RAID を構成します。

次の手順を参照してください。

- [79 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」](#)
- [88 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」](#)

サーバーに Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、BIOS RAID 構成を使用して RAID を構成できます。[97 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」](#)を参照してください。

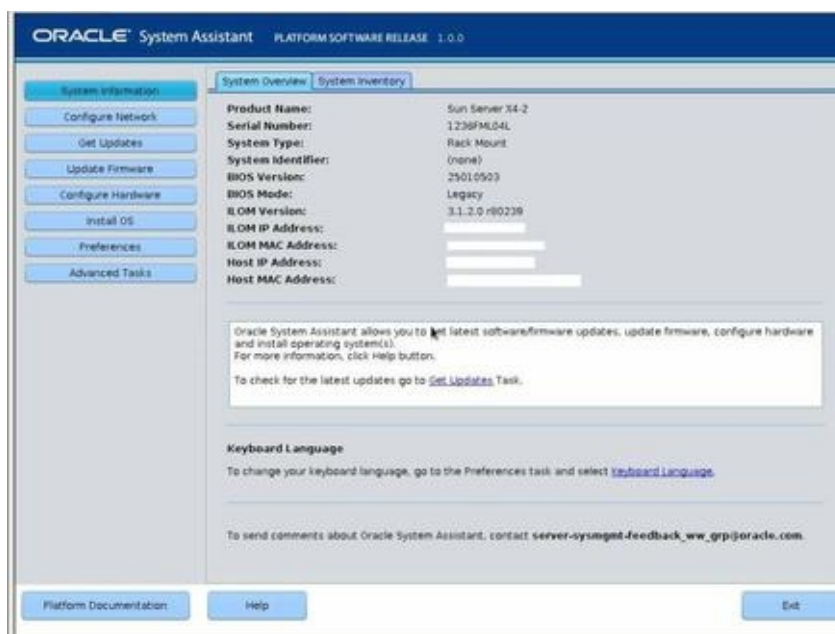
▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成

ブート可能な RAID 0 ボリュームを作成することによって OS インストール用のサーバーハードドライブを準備するには、Oracle System Assistant を使用します。

1. **Oracle System Assistant を起動します。**

[69 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)を参照してください。

「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。



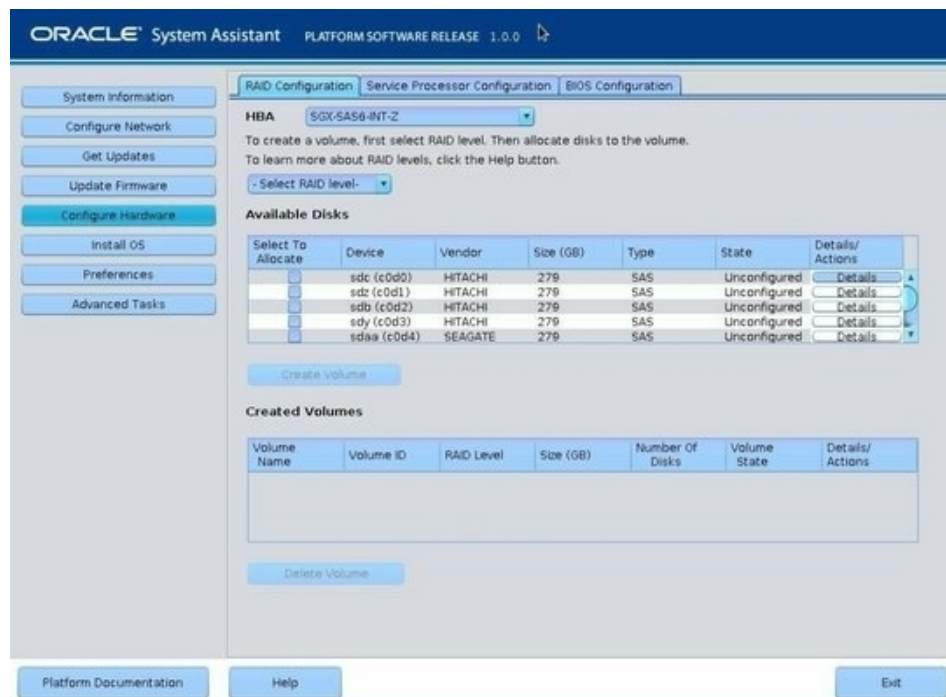
2. 「System Overview」画面で、BIOS モードが、オペレーティングシステムをインストールするときに使用する予定のブートモード (UEFI またはレガシー BIOS) に設定されていることを確認します。

注記 - RAID 構成で使用する BIOS ブートモードは、オペレーティングシステムをインストールするときに使用するモードと一致している必要があります。さらに、サポートされているすべてのオペレーティングシステムが UEFI ブートモードをサポートしているわけではありません。UEFI ブートモードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、[26 ページの「UEFI BIOS」](#)を参照してください。

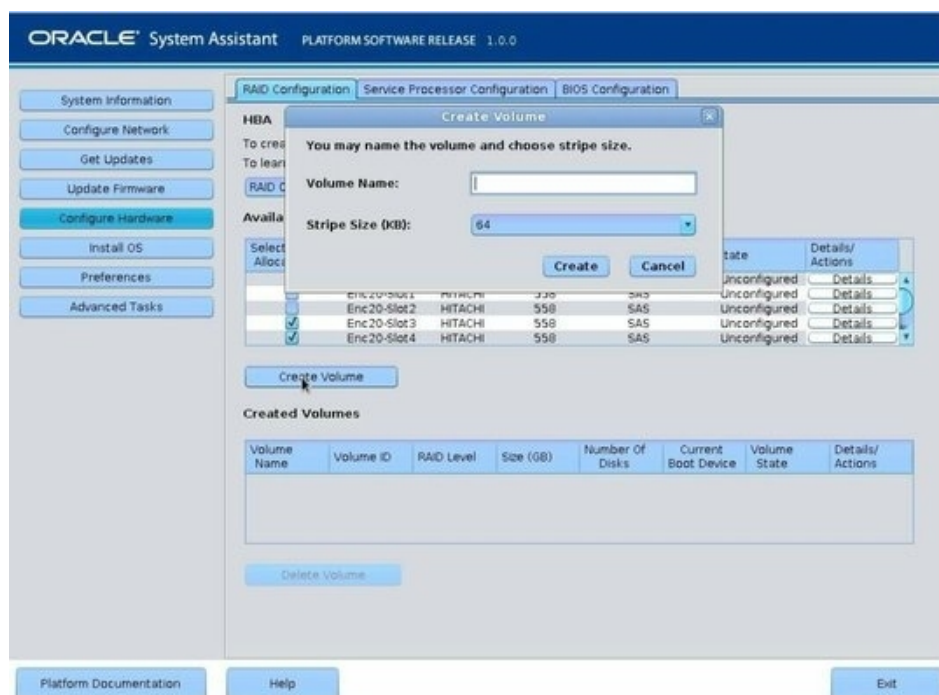
UEFI ブートモードとレガシーブートモードを切り替えるには、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

3. 「Configure Hardware」ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。

「RAID Configuration」画面が表示されます。



4. 「HBA」リストボックスで「SGX-SAS6-R-INT-Z HBA」を選択します。
これは、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA です。
5. 「Select RAID Level」リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。
「RAID - 0」を選択します。
6. 「Available Disks」テーブルで、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択し、「Create Volume」ボタンをクリックします。
「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



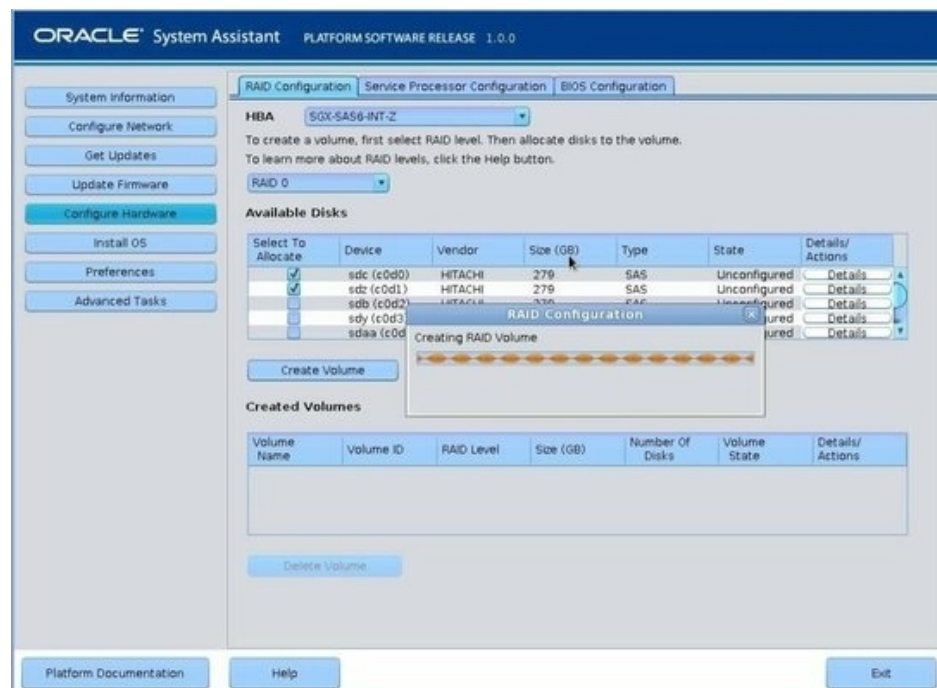
7. 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

a. (オプション) ボリューム名を入力します。

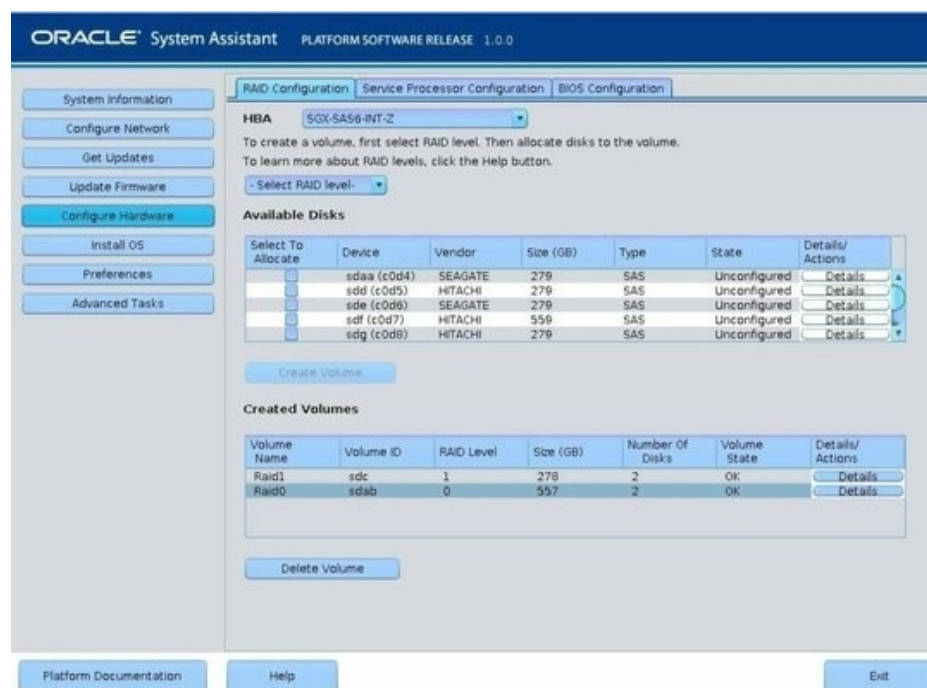
ボリューム名の入力はオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。

b. 「Create」をクリックします。

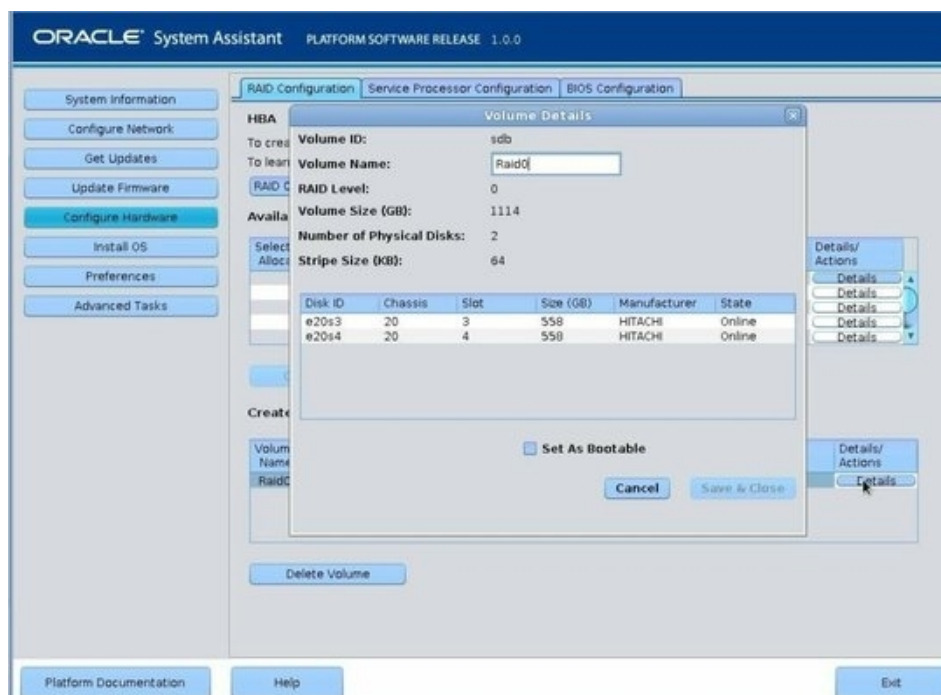
「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。



ボリュームは、作成後、「Created Volumes」表に表示されます。



8. 「Created Volumes」表の「Details/Action」列にある「Details」ボタンをクリックします。
「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。



9. 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

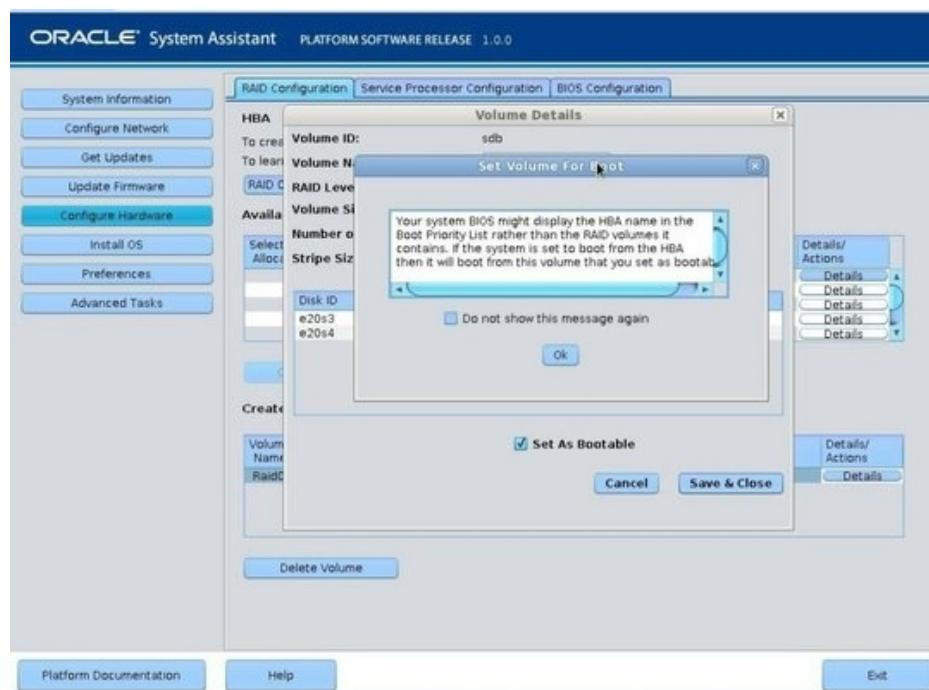
- a. ボリュームの詳細を確認します。
- b. (オプション)「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、変更します。

以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力した場合、それをここで変更することはできませんが、その名前全体を削除することはできません。

注記 - ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでもボリューム名を変更できますが、ボリューム名をいったん割り当てたあとで削除することはできません。

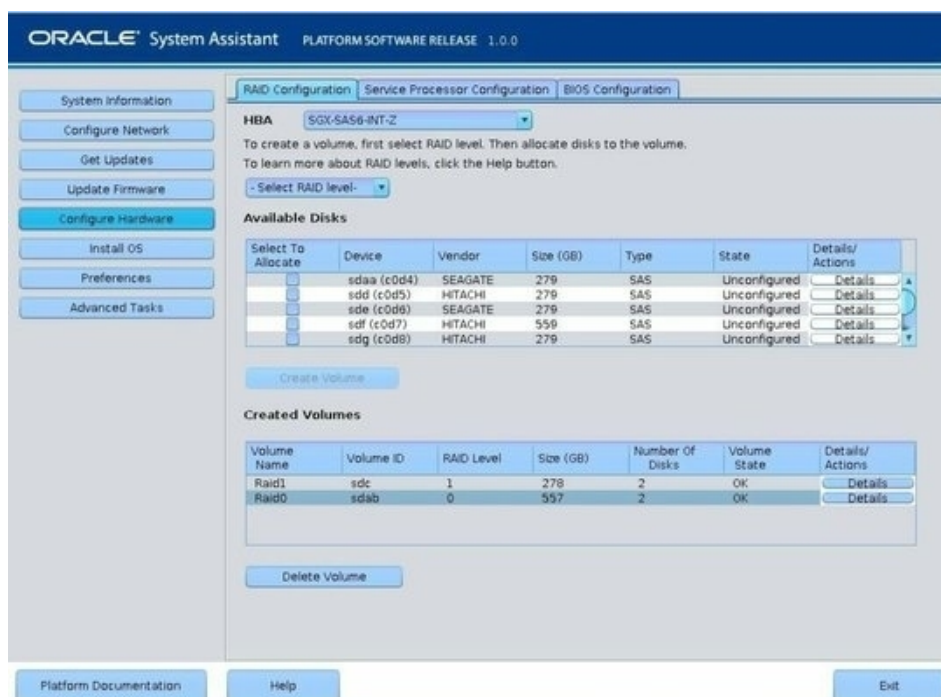
- c. 「Set As Bootable」ボックスにチェックマークを付けます。
- d. 「Save & Close」をクリックします。

「Set Volume For Boot」確認ダイアログが表示されます。



10. 「OK」をクリックします。

「RAID Configuration」画面が表示され、その RAID ボリュームが現在のブートデバイスとして表示されます。



11. ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」ボタンをクリックします。

これで RAID 構成タスクが完了します。

12. 次のいずれかを実行します。

- ほかの任意の Oracle System Assistant タスクを選択するには、左側のパネルメニューで対応するボタンをクリックします。たとえば、RAID の構成後であれば、「Install OS」タスクを選択してオペレーティングシステムのインストールを実行することをお勧めします。
- Oracle System Assistant の「System Overview」画面に戻るには、左側のメニューパネルで「System Information」をクリックします。
- Oracle System Assistant を終了するには、「Exit」をクリックします。

参照 ■ [113 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

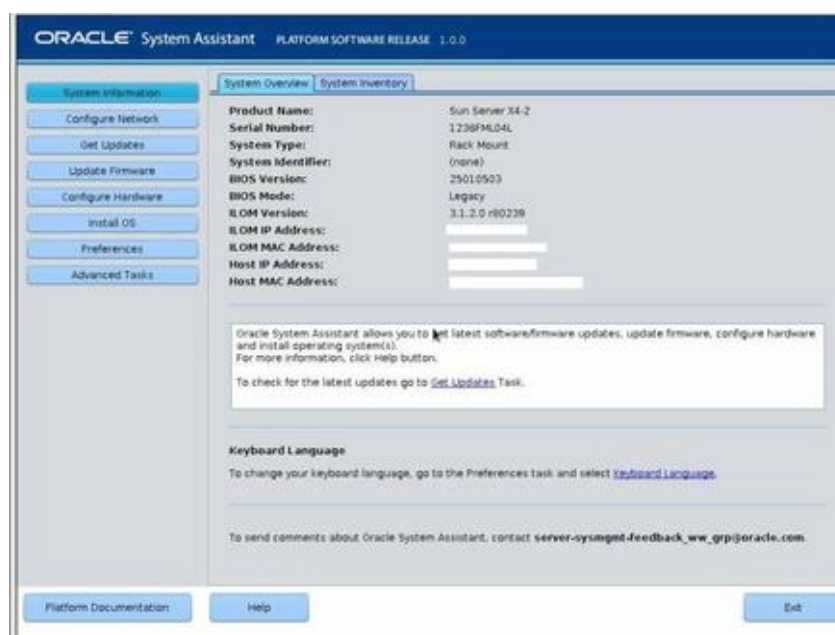
▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成

始める前に Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したシステムでは、OS をインストールする前にブート可能なボリュームを作成する必要があります。ドライブに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA によって作成されたボリュームがない場合、システムはドライブを認識しません。ブートドライブとして使用する予定のドライブに複数のボリュームがある場合は、OS のインストール先ボリュームをブートデバイスとして設定します。

1. Oracle System Assistant を起動します。

69 ページの「Oracle System Assistant の起動」を参照してください。

「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。



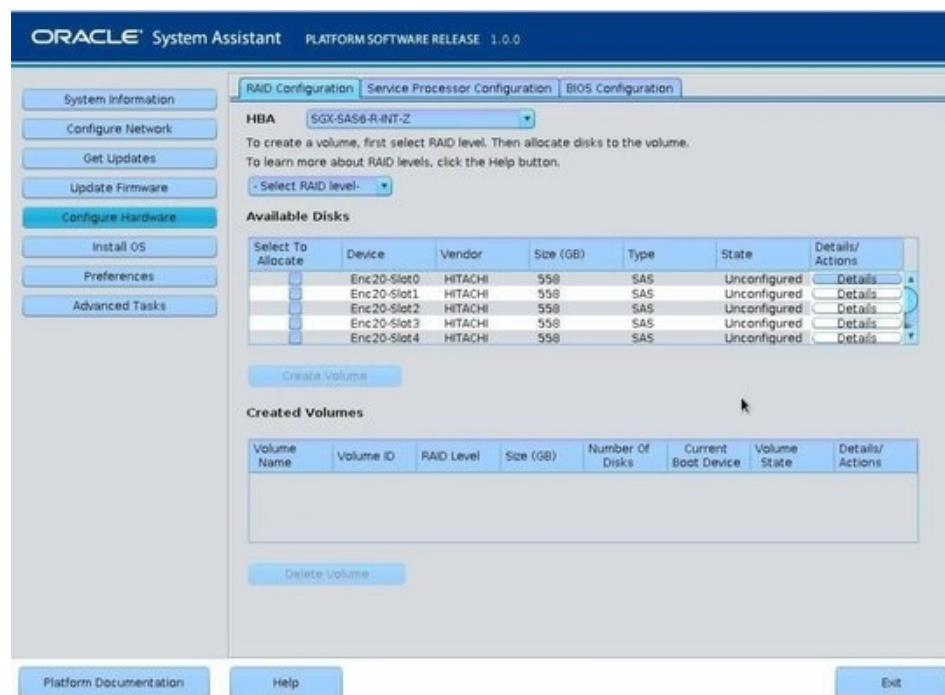
2. 「System Overview」画面で、BIOS モードが、オペレーティングシステムをインストールするときに使用する予定のブートモード (UEFI またはレガシー BIOS) に設定されていることを確認します。

注記 - RAID 構成で使用する BIOS ブートモードは、オペレーティングシステムをインストールするときに使用するモードと一致する必要があります。さらに、サポートされているすべてのオペレーティングシステムが UEFI ブートモードをサポートしているわけではありません。UEFI ブートモードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、[26 ページの「UEFI BIOS」](#)を参照してください。

UEFI ブートモードとレガシーブートモードを切り替えるには、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

3. 「Configure Hardware」ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。

「RAID Configuration」画面が表示されます。

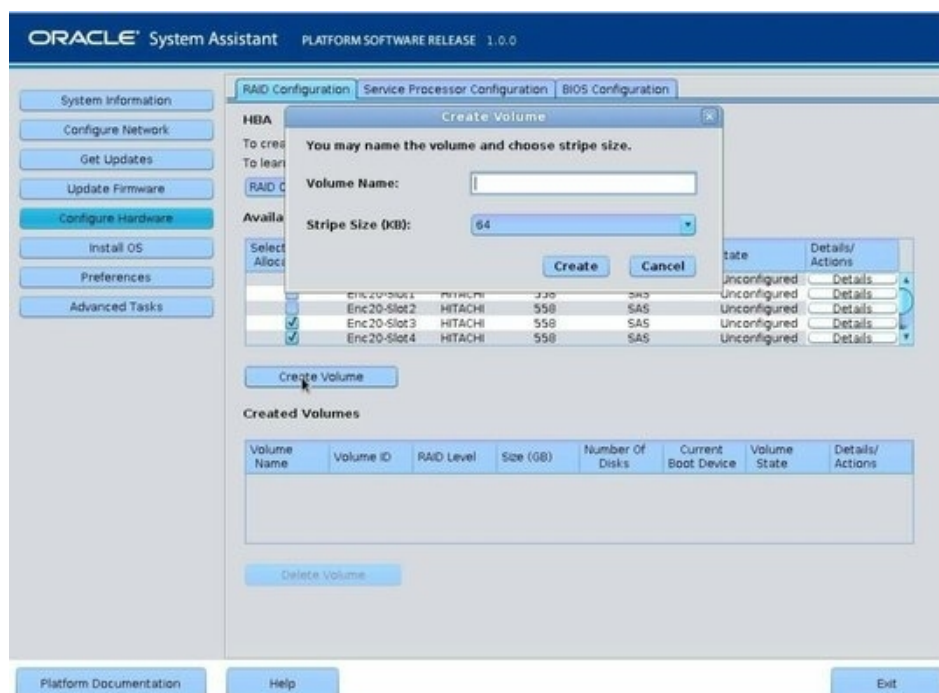


4. 「HBA」リストボックスで「SGX-SAS6-R-INT-Z HBA」を選択します。
これは、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA です。
5. 「Select RAID Level」リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。

Oracle System Assistant は、RAID-0、RAID-1、および RAID-10 をサポートしています。

6. 「Available Disks」テーブルで、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択し、「Create Volume」ボタンをクリックします。

「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



7. 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

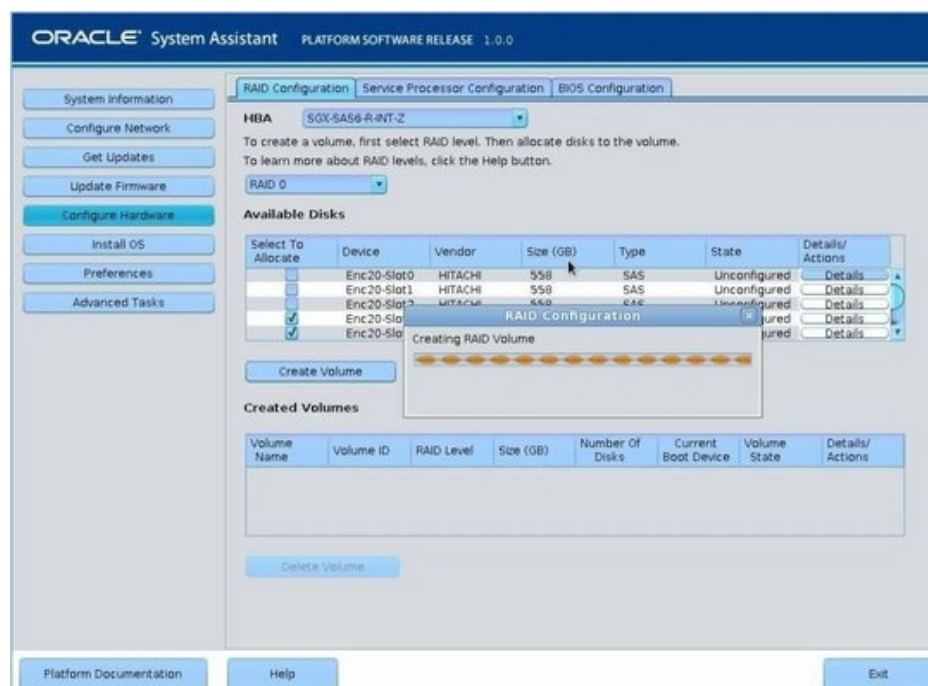
- a. (オプション) ボリューム名を入力します。

ボリューム名の入力オプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。

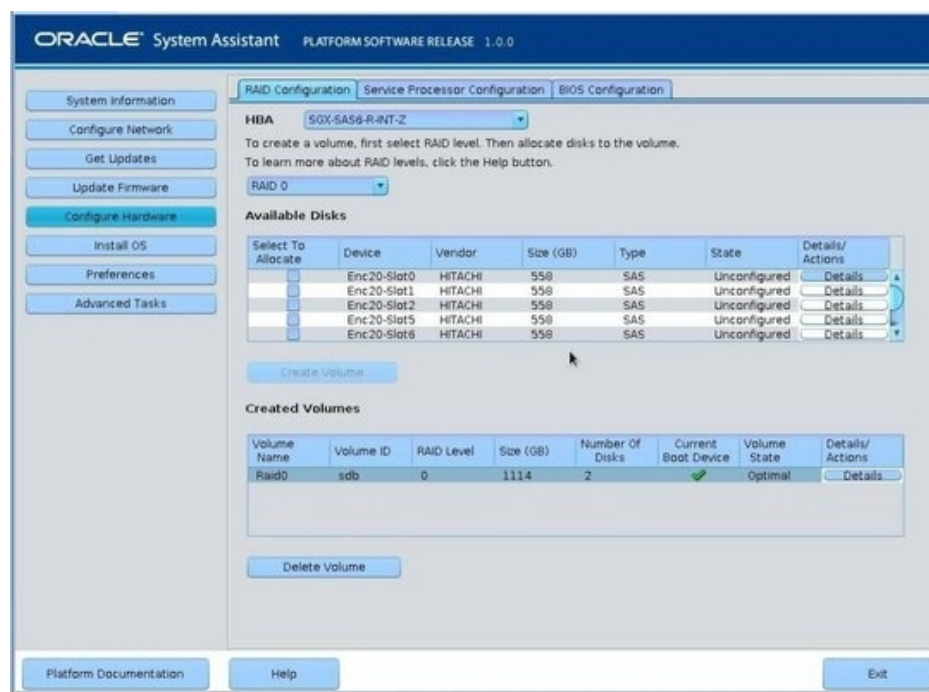
- b. ボリュームのストライプサイズを選択します。

- c. 「Create」をクリックします。

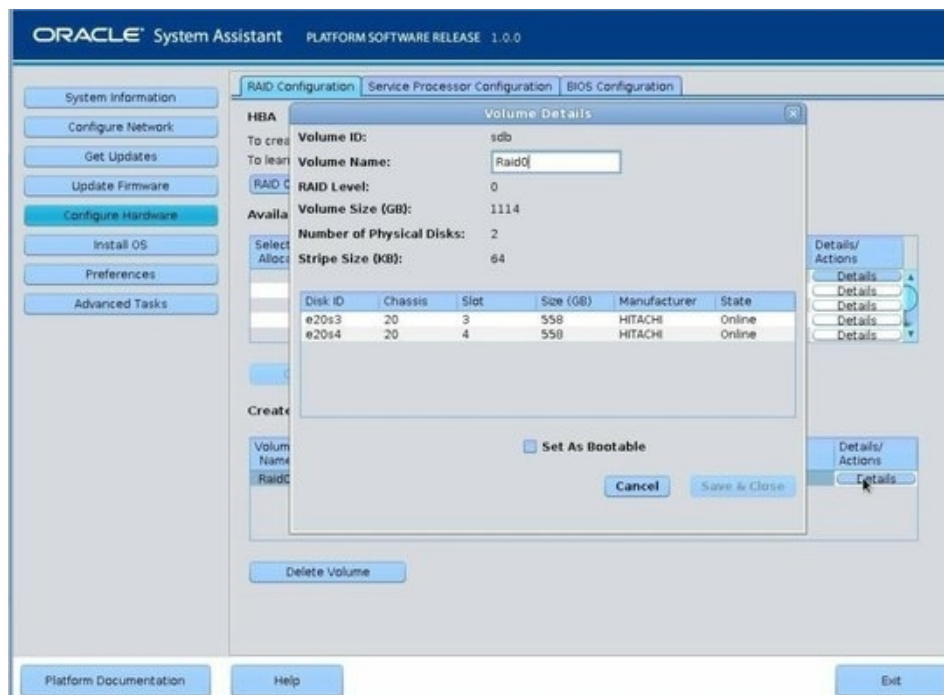
「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。



ボリュームは、作成後、「Created Volumes」表に表示されます。



8. 「Created Volumes」表の「Details/Action」列にある「Details」ボタンをクリックします。
「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。



9. 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

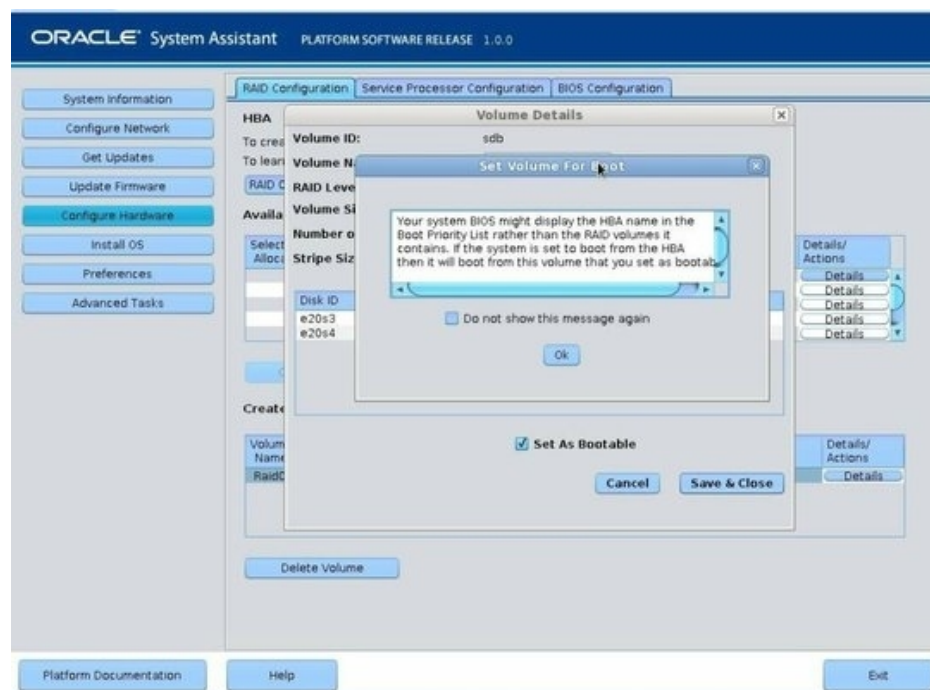
- a. ボリュームの詳細を確認します。
- b. (オプション)「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、変更します。

以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力した場合、それをここで変更することはできませんが、その名前全体を削除することはできません。

注記 - ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでもボリューム名を変更できますが、ボリューム名をいったん割り当てたあとで削除することはできません。

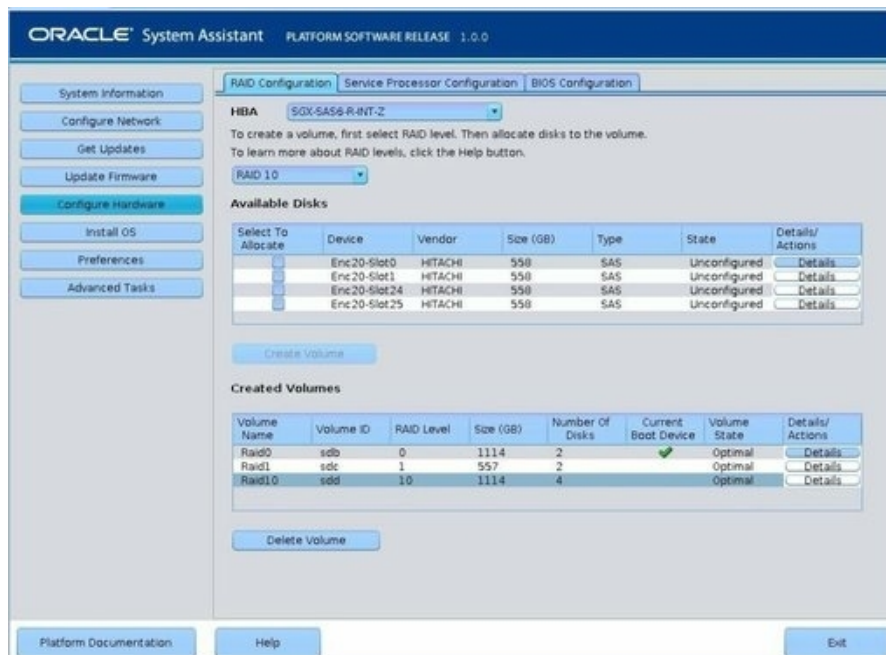
- c. 「Set As Bootable」ボックスにチェックマークを付けます。
- d. 「Save & Close」をクリックします。

「Set Volume For Boot」確認ダイアログが表示されます。



10. 「OK」をクリックします。

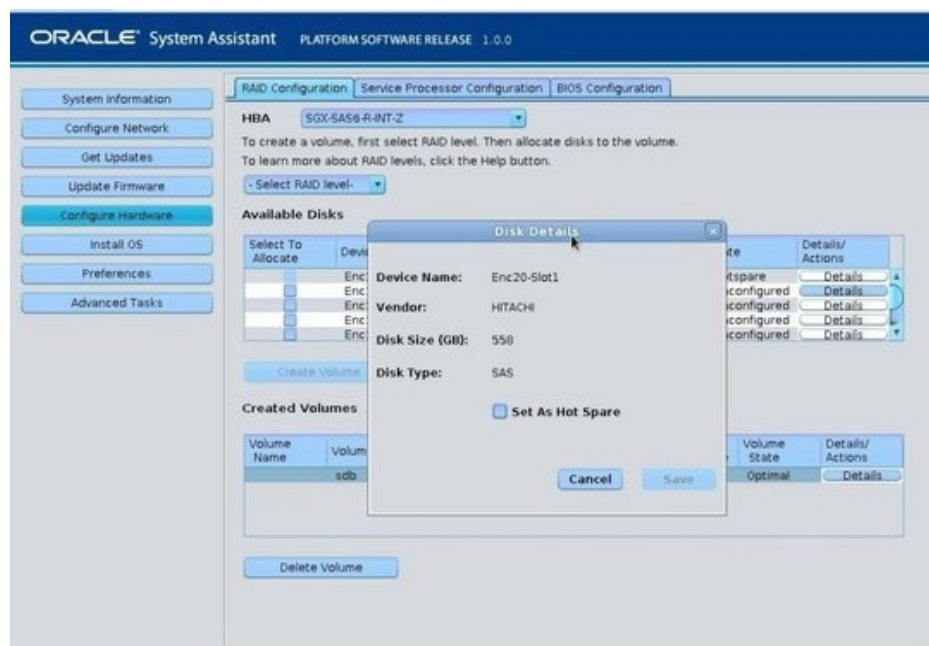
「RAID Configuration」画面が表示され、その RAID ボリュームが現在のブートデバイスとして表示されます。



11. 作成されたボリュームをグローバルホットスペアとして指定する場合は、次の手順を実行します。それ以外の場合は、[ステップ 12](#)に進みます。

- a. 「Details/Actions」列で「Details」ボタンをクリックします。

「Disk Details」ダイアログボックスが表示されます。



- b. 「Set as Hot Spare」ボックスにチェックを入れます。

注記 - Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA では最大 256 個のホットスペアを作成できます。

- c. 「Save」をクリックします。

「Disk Details」ダイアログボックスが閉じます。

12. ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」ボタンをクリックします。

これで RAID 構成タスクが完了します。

13. 次のいずれかを実行します。

- ほかの任意の Oracle System Assistant タスクを選択するには、左側のパネルメニューで対応するボタンをクリックします。たとえば、RAID の構成後であれば、「Install OS」タスクを選択してオペレーティングシステムのインストールを実行することをお勧めします。

- Oracle System Assistant の「System Overview」画面に戻るには、左側のメニューパネルで「System Information」をクリックします。
- Oracle System Assistant を終了するには、「Exit」をクリックします。

参照 ■ [113 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成

Oracle System Assistant を使用して RAID を構成できますが、Oracle System Assistant を使用できない場合は、HBA ファームウェアに組み込まれている BIOS RAID 構成ユーティリティを使用できます。RAID を構成する手順は、サーバーに取り付けられている HBA の種類によって異なります。

これらのユーティリティの使用方法については、次のセクションを参照してください。

- [97 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成」](#)
- [100 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成」](#)

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI ブートモードとレガシーブートモードに設定したサーバーでの RAID 構成をサポートします。ブートモードごとに異なるユーティリティが用意されています。

注記 - オペレーティングシステムと仮想マシンソフトウェアの中には、レガシーブートモードしかサポートしていないものがあります。UEFI ブートモードをサポートするオペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアの一覧については、[26 ページの「UEFI BIOS」](#)を参照してください。

- [97 ページの「UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)
- [99 ページの「レガシーブートモードでの RAID の構成」](#)

▼ UEFI ブートモードでの RAID の構成

1. サーバー (ホスト) の電源を入れるかリセットします。

たとえば、次のいずれかを実行します。

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒) 押してホストの電源を切り、もう一度電源ボタンを押して電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースから「**Host Management**」>「**Power Control**」を選択し、次に「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- Oracle ILOM CLI で **reset /System** と入力します。

BIOS 画面が表示されます。

2. BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。

しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティが表示されます。

3. 右矢印キーを使用して「UEFI Driver Control」メニューに移動します。

「UEFI Driver Control」メニューが表示されます。



4. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「LSI SAS2 MPT Controller」メニューオプションに移動して、Enter キーを押します。

LSI SAS MPT コントローラのメニューが表示されます。



注記 - LSI SAS MPT コントローラのメニューはサーバーの構成によって異なります。

5. BIOS 構成ユーティリティを使用して、サーバー上に RAID を構成します。

BIOS 構成ユーティリティを使用して UEFI ブートモードで RAID を構成する方法については、『*Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA 設置ガイド (HBA モデル SGX-SAS6-INT-Z および SG-SAS6-INT-Z 対応)*』(<http://docs.oracle.com/cd/E19337-01/index.html>) で、x86/64 システムでのブート可能ドライブの作成手順を参照してください。

参照 ■ [113 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

▼ レガシーブートモードでの RAID の構成

1. サーバー (ホスト) の電源を入れるかリセットします。

たとえば、次のいずれかを実行します。

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒) 押してホストの電源を切り、もう一度電源ボタンを押して電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースから「**Host Management**」 > 「**Power Control**」を選択し、次に「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- Oracle ILOM CLI で **reset /System** と入力します。

BIOS 画面が表示されます。

ブートプロセス中に、システム内の、検出された SAS アダプタと、検出された HBA に接続されているデバイスに関する情報が BIOS の初期化バナーに一覧表示されます。

2. 次のプロンプトが表示されたら、Ctrl キーを押しながら C キーを押します。

Press Ctrl-C to start LSI Corp Configuration Utility...

「LSI Corp Config Utility」メニューが表示されます。



3. LSI Corp Config Utility を使用して、サーバー上に RAID を構成します。

BIOS 構成ユーティリティを使用してレガシーブートモードで RAID を構成する方法については、『Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA 設置ガイド (HBA モデル SGX-SAS6-INT-Z および SG-SAS6-INT-Z 対応)』(<http://docs.oracle.com/cd/E19337-01/index.html>) で、x86/64 システムでのブート可能ドライブの作成手順を参照してください。

参照 ■ 113 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI ブートモードとレガシーブートモードに設定したサーバーでの RAID 構成をサポートします。ブートモードごとに異なるユーティリティが用意されています。

注記 - オペレーティングシステムと仮想マシンソフトウェアの中には、レガシーブートモードしかサポートしていないものがあります。UEFI ブートモードをサポートしていないオペレーティングシステムおよび仮想マシンソフトウェアのリストについては、[26 ページの「UEFI BIOS」](#)を参照してください。

次の手順のいずれかを使用して RAID を構成します。

- [101 ページの「UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)
- [109 ページの「レガシーブートモードでの RAID の構成」](#)

▼ UEFI ブートモードでの RAID の構成

1. ホストの電源を入れるかリセットします。

たとえば、ホストをリセットするには次のいずれかを実行します。

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒) 押してホストの電源を切り、もう一度電源ボタンを押して電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースから「**Host Management**」>「**Power Control**」を選択し、次に「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- Oracle ILOM CLI で **reset /System** と入力します。

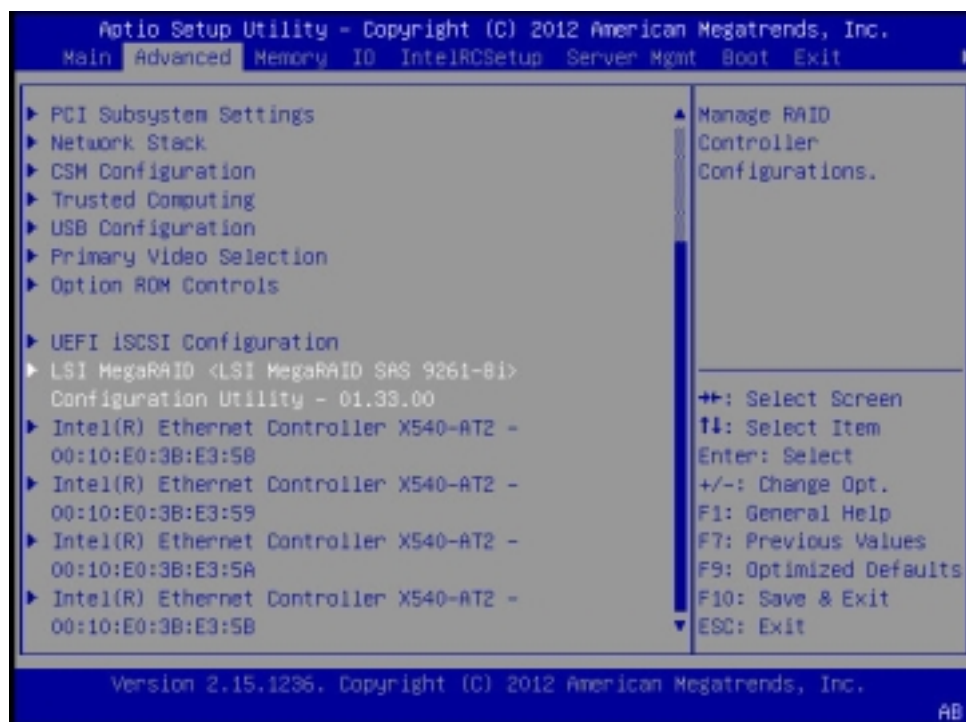
BIOS 画面が表示されます。

2. BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。

BIOS 設定ユーティリティが表示されます。

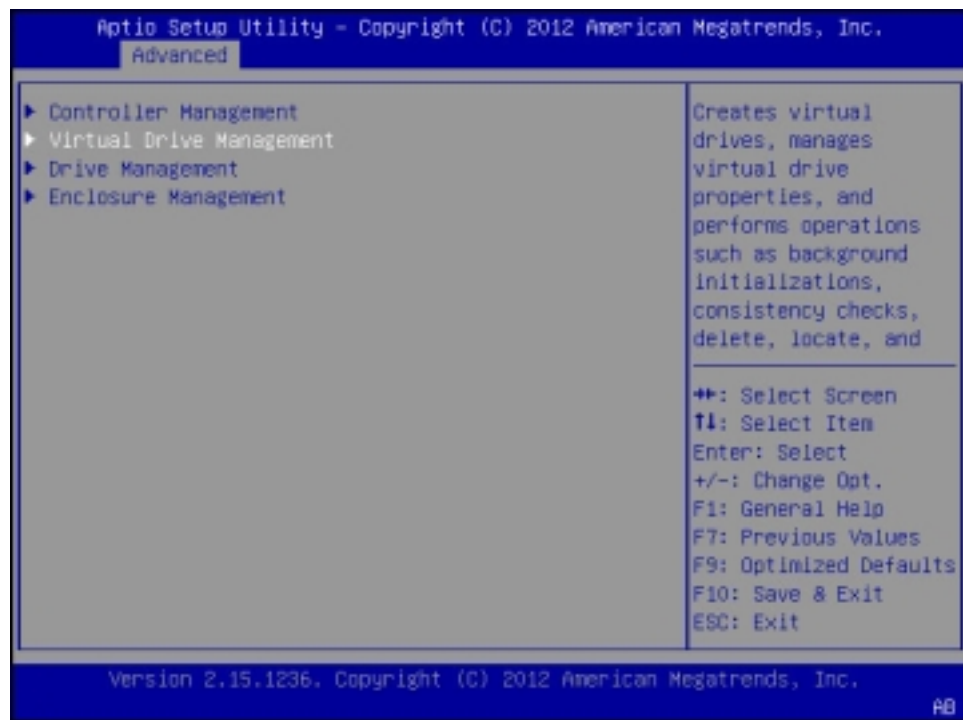
3. 右矢印キーを使用して「UEFI Driver Control」メニューに移動します。

「UEFI Driver Control」メニューが表示されます。



4. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「LSI MegaRAID Configuration Utility」メニューオプションに移動して、Enter キーを押します。

LSI MegaRAID Configuration Utility のメニューが表示されます。



5. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Virtual Drive Management」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Virtual Drive Management」メニュー画面が表示されます。



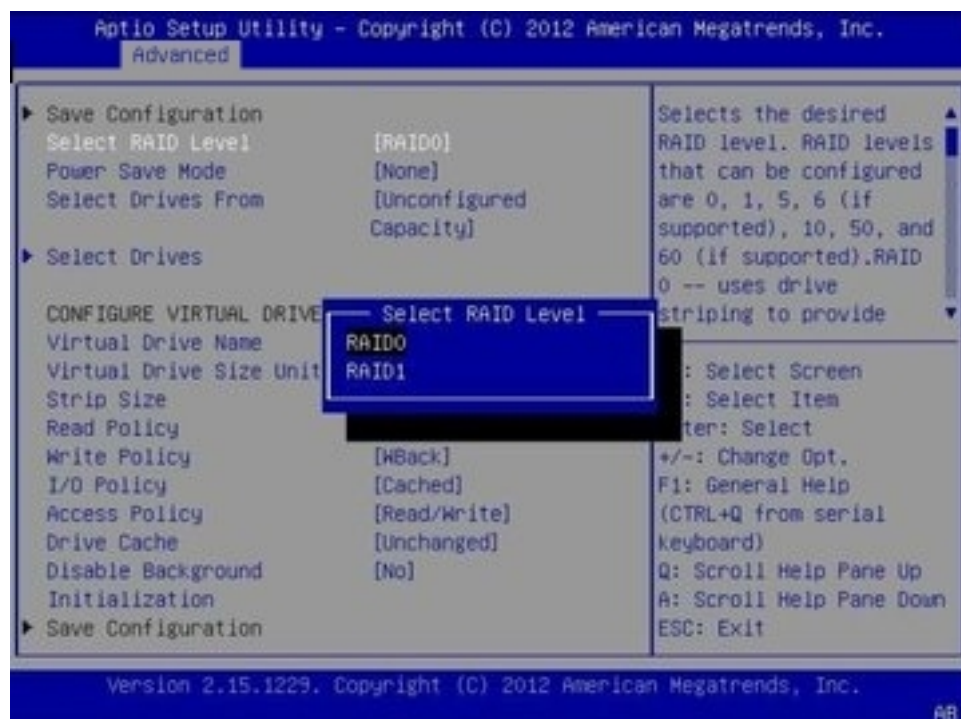
6. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Create Configuration」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。



7. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Select RAID Level」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Select RAID Level」ダイアログボックスが表示されます。



8. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、目的の RAID レベルを選択し、Enter キーを押します。

「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。

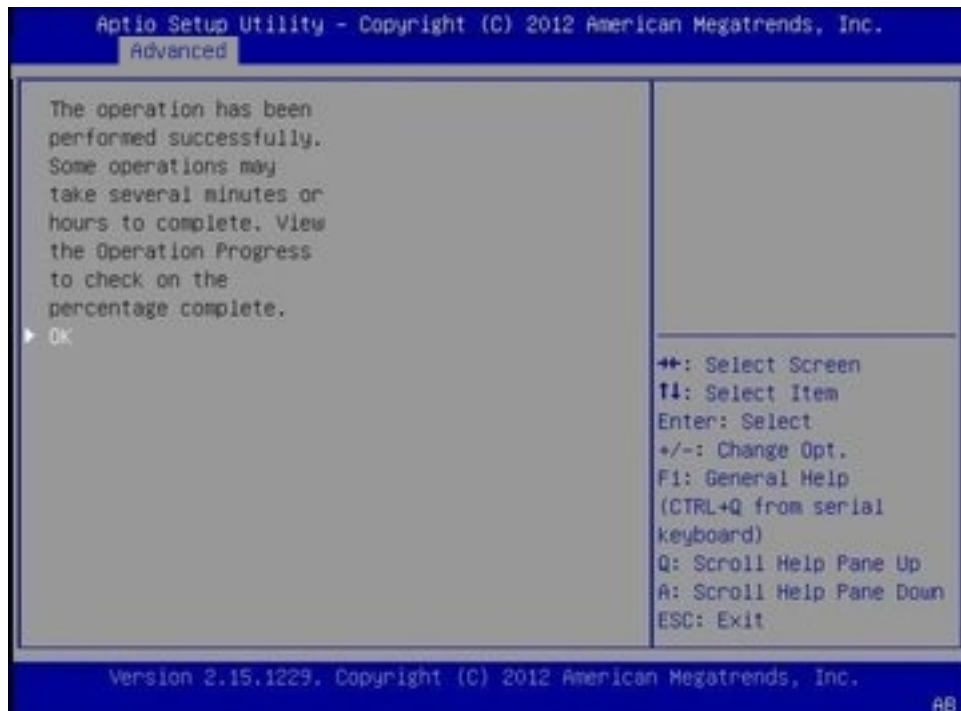


9. 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Select Drives」オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Drive Selection」画面が表示されます。



10. 「Drive Selection」画面で、メディアタイプ、インタフェースタイプ、RAID 構成に含めるドライブを選択し、「Apply Changes」オプションを選択して、Enter キーを押します。
「RAID Configuration Confirmation」画面が表示されます。



11. 「OK」を選択し、Enter キーを押して、RAID の確認を承諾します。

これにより、RAID の構成が完了します。

参照 ■ [113 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

▼ レガシーブートモードでの RAID の構成

始める前に BIOS RAID 構成ユーティリティは HBA ファームウェアにあります。この手順は、次のいずれかに該当する場合に使用します。

- 特定の OS インストール先ハードドライブ上に RAID を構成する場合で、サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていないか、使用しない場合。
- RAID ボリュームは作成しないが、OS をインストールする予定のハードドライブが初期化されていない。
- オペレーティングシステムをインストールする予定のストレージドライブを使ってレベル 5、6、50、または 60 の RAID ボリュームを作成する場合。

注記 - Oracle System Assistant は、SGX-SAS6-R-INT-Z HBA に関しては、RAID 0、RAID 1、および RAID 10 しかサポートしていません。

1. 1 つ以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。

次の場所にある MegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーズガイドで、WebBIOS 構成ユーティリティを使用したストレージ構成の作成手順を参照してください。

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx

注記 - *MegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーズガイド*には、仮想ドライブをブート可能にするための手順は記載されていません。ドライブをブート可能にするには、仮想ドライブを作成したあとで、このセクションの次の手順に進んでください。

2. 仮想ドライブをブート可能にし、まず電源を投入するか、ホストをリセットします。

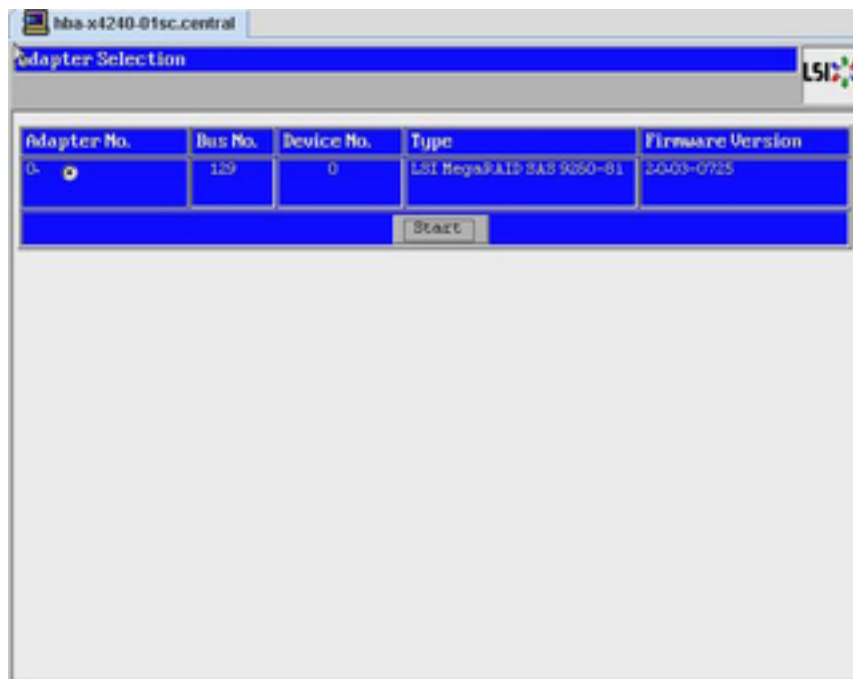
たとえば、サーバーをリセットするには次のいずれかを実行します。

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを (約 1 秒) 押してホストの電源を切り、もう一度電源ボタンを押して電源を入れます。
- Oracle ILOM Web インタフェースから「**Host Management**」>「**Power Control**」を選択し、次に「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- Oracle ILOM CLI で **reset /System** と入力します。

BIOS 画面が表示されます。

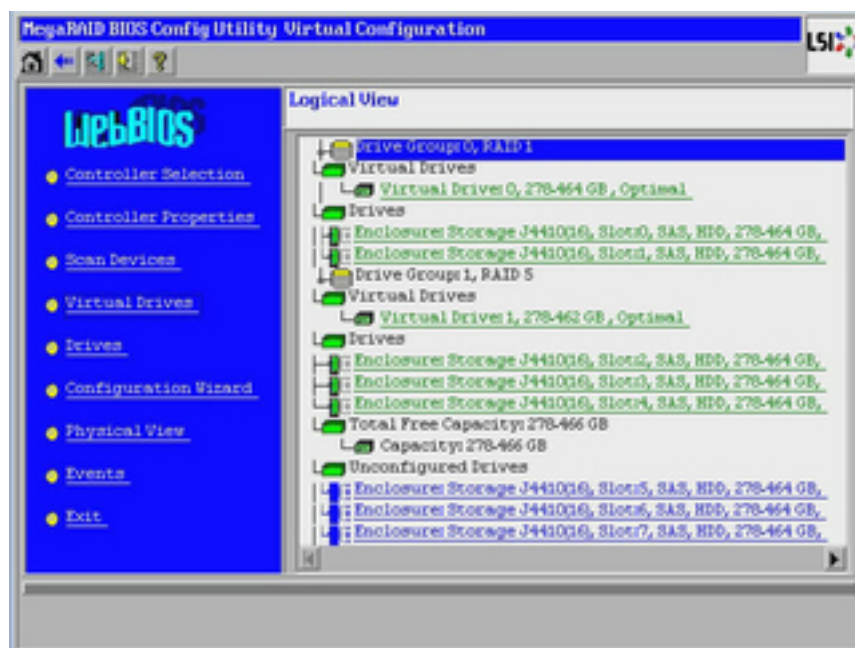
3. 「Press Ctrl><H> for WebBIOS...」というプロンプトが表示されたら、すぐに Ctrl キーを押しながら H キーを押して LSI MegaRAID ユーティリティにアクセスします。

「Adapter Selection」画面が表示されます。

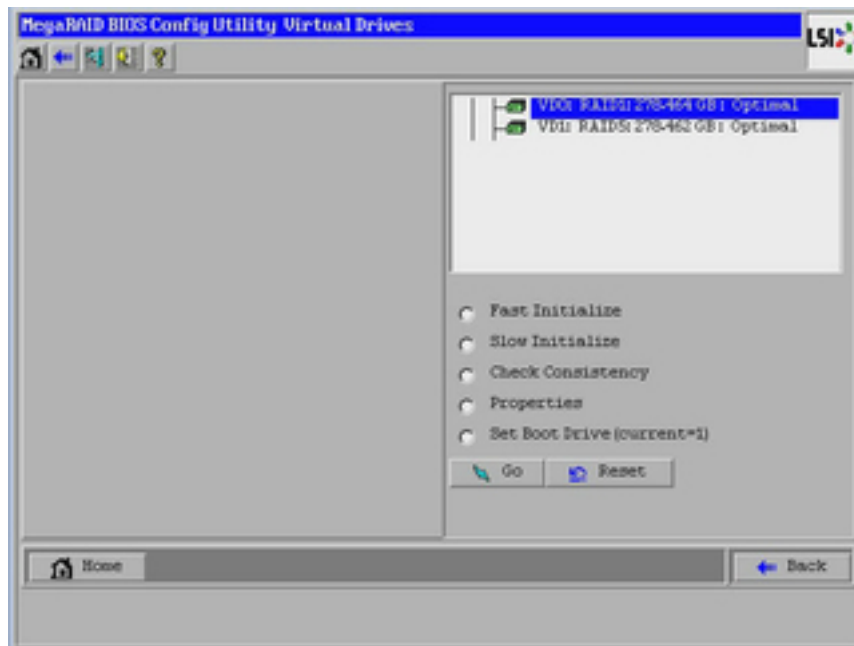


4. 「Adapter Selection」画面で「Start」をクリックします。

LSI MegaRAID BIOS Config ユーティリティの「Virtual Configuration」画面が表示されます。



5. 「Virtual Drives」をクリックします。
「Virtual Drives」画面が表示されます。



6. ブート可能にする仮想ドライブを選択します。
7. 「Set Boot Drive」をクリックし、「Go」をクリックします。

このタスクの実行方法の詳細は、LSI の MegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーズガイド (http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx) を参照してください。

オペレーティングシステムおよびドライバの設定

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) を構成したり、サーバーでサポートされている OS をインストールしたりできます。次の表に、OS のインストールと構成に関する情報の入手方法を示します。

目的	使用するツールまたはドキュメント
インストール済みの OS を構成します	■ 「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」 ■ 「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」 ■ 「インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成」
OS をインストールし、ドライバを更新します	■ 『Sun Server X4-8 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』

目的	使用するツールまたはドキュメント
	■ 『Sun Server X4-8 Oracle VM インストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-8 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-8 Microsoft Windows オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-8 VMware ESXi インストールガイド』

インストール済み Oracle Solaris OS の構成

このセクションでは、注文によりサーバーにインストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成する手順について説明します。

注記 - インストール済み Oracle Solaris オペレーティングシステムのサポートされるバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs> にある『Sun Server X4-8 プロダクトノート』を参照してください。

次のセクションの手順を実行します。

手順	タスク	リンク
1	Oracle Solaris OS のインストール準備を行い、使用しているサーバー環境の構成ワークシートに記入します。	115 ページの「Oracle Solaris 構成の準備」
2	インストール済みの Oracle Solaris OS を構成します。	118 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
3	Oracle Solaris の再インストールまたは別のバージョンの Oracle Solaris をインストールします。	120 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール」
4	Oracle Solaris OS ドキュメントを検索します	121 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Solaris 構成の準備

インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの構成を開始する前に、該当する RAID 構成の制限事項を確認してください。次に、Oracle Solaris 構成のワークシートを完成させます。

インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム上での RAID の制限

Oracle Solaris のインストール済みイメージは非 RAID 構成でしか構成できません。RAID 構成が必要な場合は、サーバー上で RAID を構成してから、目的の RAID 構成で Oracle Solaris OS (またはほかの OS) の新規インストールを実行する必要があります。

Oracle Solaris OS の構成ワークシート

オペレーティングシステムを構成する前に、次の表の構成ワークシートを使用して、必要な情報を収集します。使用するシステムのアプリケーションに関連する情報のみを収集する必要があります。

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	☐ ネットワークに接続されている ☐ ネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	☐ はい ☐ いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを入力します。	IP アドレス DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例: 192.168.100.1	
サブネット	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクは何か。 例: 255.255.255.0	255.255.0.0*
IPv6	このマシンで IPv6 を有効にするかどうか。	☐ はい ☐ いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを構成するかどうか。 「はい」の場合、この情報を収集します。 デフォルトレلم: 管理サーバー: 最初の KDC: (オプション) 追加の KDC:	■ はい ■ いいえ*
ネームサービス	ネームサービス 該当する場合、このシステムでどのネームサービスを使用するか。	■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。 DNS または NIS	
NIS+ および NIS	<i>NIS+ または NIS を選択した場合</i>、ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムに検索させますか。 NIS を選択した場合: ■ NIS ドメインを指定する、または ■ NIS サーバーを指定するか検索するかを指定する。	■ 指定する ■ 検索する*
DNS	<i>DNS を選択した場合</i>、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。 また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。	検索ドメイン: 検索ドメイン: 検索ドメイン:
LDAP	<i>LDAP を選択した場合</i>、LDAP プロファイルに関する情報を入力します。	プロファイル名: プロファイルサーバー: LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。 プロキシバインド識別名: プロキシバインドパスワード:

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
デフォルトルート	デフォルトルート IP アドレスを指定するか、OS インストールプログラムに自動検出させるか。 デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。 次の選択肢があります。 ■ IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムをリポートすると、指定された IP アドレスがデフォルトルートになります。 ■ OS インストールプログラムに IP アドレスを検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーター検索用のインターネット制御メッセージプロトコル (ICMP) を使用して自身を通知している必要があります。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムのブート時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 ■ この時点でルーターを使用していないか、ソフトウェアによって IP アドレスを検出しない場合には、「なし」を選択することもできます。ソフトウェアは、リポート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。	■ 指定する ■ 検出する ■ なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法。	■ 地理的地域* ■ GM からの時差 ■ タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成

115 ページの「[Oracle Solaris 構成の準備](#)」にある Oracle Solaris オペレーティングシステムのワークシートが完成したら、次の手順を使用してインストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムを構成します。

1. Oracle ILOM にログインしていない場合、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで Ethernet 接続からログインします。
[「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。
2. 次のようにして、ホストの電源を入れるか、ホストをリセットします。
 - ホストの電源を投入するには、次のいずれかの方法を使用します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. リモートコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
```

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「Remote Control」>「Redirection」を選択します。次に、「Launch Remote Console」ボタンをクリックして、ビデオコンソールのリダイレクトを起動します。

ホストがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。例 (実際のバージョンは異なる場合があります):

```
GNU GRUB Version 0.97 (607K lower / 2087168K)
```

```
s11_2011.11_a - Serial Port (ttya)
```

```
s11_2011.11_a - Graphics Adapter
```

4. 「GRUB」メニューから 10 秒以内に選択します。

- Oracle ILOM CLI を使用している場合は、上下の矢印キーを使用して「Serial Port (ttya)」オプションを選択し、Enter を押します。
- Oracle ILOM リモートコンソール (または直接ビデオポート接続) を使用している場合は、上下の矢印キーを使用して、「Graphics Adapter」オプションを選択し、Enter を押します。

注記 - 必要に応じて、「GRUB」メニューで、e と入力してブート前にコマンドを編集するか、c と入力してコマンド行を開始できます。

注記 - 選択を行わないと、デフォルトで「Serial Port (ttya)」が使用されます。つまり、残りの OS 構成プロセスでは、システムが、ビデオポートではなくシリアルポートに出力を送信します。

5. Oracle Solaris 11 インストーラの画面に表示されるプロンプトに従ってオペレーティングシステムを構成します。

115 ページの「Oracle Solaris 構成の準備」にある Oracle Solaris オペレーティングシステム構成ワークシートで収集した情報を使用し、プロンプトに従って、システムおよびネットワークの情報を入力します。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって画面は異なります。

システム構成情報を入力すると、サーバーのブートプロセスが完了し、Oracle Solaris ログインプロンプトが表示されます。

- 参照
- 120 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール」。
 - 登録を含む Oracle Solaris OS の使用については、121 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。

Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Oracle Solaris 11 OS を再インストール、または別バージョンの Oracle Solaris OS をインストールする場合は、関連する Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

Oracle Solaris OS のソフトウェアは、次のサイトからダウンロードできます。

- Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris11/downloads/index.html>

- Oracle Solaris パッチをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<https://support.oracle.com>

関連情報

- 118 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
- 121 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント

このセクションには、Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。指定されている場合は、x86 システム固有の説明手順に従ってください。

Oracle Solaris 11 Information Library は、次の場所にあります。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/solaris-11-192991.html>

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのインストール手順の詳細は、『Oracle Solaris 11 システムのインストール』:「イントールの準備」および『Oracle Solaris 11 システムのインストール』:「メディアからブートする自動インストール」を参照してください。

パッチおよびその他の最新情報については、『Sun Server X4-8 プロダクトノート』を参照してください。

パッチおよびパッチのインストール手順については、My Oracle Support Web サイト (<https://support.oracle.com>) にアクセスしてください

インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成

このセクションでは、注文済みの場合に、サーバーにインストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成する方法について説明します。インストール済みのイメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

注記 - インストール済み Oracle VM のサポートされるバージョンに関する最新情報については、『*Sun Server X4-8 プロダクトノート*』を参照してください。

インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成するには、次の表の手順を、記載された順序で実行します。

手順	タスク	リンク
1	Oracle VM ソフトウェアの要件を確認します。	123 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件」
2	構成時に必要な情報を収集します。	124 ページの「Oracle VM 構成ワークシート」
3	インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成します。	124 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」
4	Oracle VM の使用を開始します。	128 ページの「Oracle VM のドキュメント」

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM サーバーソフトウェアを使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、Oracle VM Manager をアップグレードしてバージョンを一致させてください。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードについては、『*Oracle VM インストールおよびアップグレードガイド*』を参照してください。Oracle VM のドキュメントは次で入手できます：

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

Oracle VM 構成ワークシート

Oracle VM サーバーを構成する前に、このセクションのワークシートを使用して必要な情報を収集してください。

構成用の情報	説明または例	回答
Oracle VM サーバーの root アカウントのパスワード	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。	
Oracle VM エージェントのパスワード	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは 6 文字以上にする必要があります。	
ネットワークインタフェース	サーバーの管理に使用するインタフェース (eth#) を入力します。	
静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを入力します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 192.0.2.0	
ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
ゲートウェイ	サーバーにゲートウェイ経由でアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。	
DNS サーバー	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを入力します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。	
ホスト名	サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。 例: xxx.oracle.com	

▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle VM サーバーを構成する方法についてのみ説明します。Oracle VM には Oracle VM Manager などのコンポーネントもありますが、仮想マシン環境をサポートするには、これらをインストールするか、これらがすでに稼働している必要があります。

1. シリアル接続で Oracle ILOM にローカルでログインするか、Ethernet 接続を使用してリモートからログインします。

[「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。

2. 次のようにして、ホストの電源を入れるか、ホストをリセットします。

- ホストの電源を投入するには、次のいずれかの方法を使用します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションパネルで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションパネルで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

ホストがブートします。

3. リモートコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションパネルで、「Remote Control」>「Redirection」を選択します。次に、「Launch Remote Console」ボタンをクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
```

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

Serial console started.

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするかどうか、または表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかどうかを選択できます。例:

```
GNU GRUB version 0.97 (613K lower / 2087424K upper memory)
```

```
Oracle VM server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

```
Oracle VM server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

4. 上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enter を押します。

「GRUB」メニューで一時停止するには、Enter 以外の任意のキーを押します。次に、使用するオプションを選択し、Enter キーを押して続行します。

注記 - 「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、少ししてから「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムは出力先をシリアルポートにしたまま続行します。

メニューに 2 つの選択肢、すなわち、通常ブートとシリアルコンソール対応のブートが表示されます。

5. 上下の矢印キーを使用して、強調表示するエントリを選択します。選択した OS をブートするには Enter を、ブート前にコマンドを編集するには「E」を、コマンド行を開始するには「C」を押します。

■ デフォルトオプションを表示するには、リストの最初のオプションを選択します。

```
Oracle VM server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.32-41ovs)
```

■ 出力をシリアルポートに表示するには、リストの 2 番目のオプションを選択します。

```
Oracle VM server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
```

6. 構成プロセスが進み、次の画面が表示されます。画面をスクロールダウンして、root のパスワードと Oracle VM Agent のパスワードを設定および確認します。

```

Starting OUM console server: [ OK ]
Starting OUM ovmwatch services: [ OK ]
Starting ovs-agent: Starting ovs-agent services:
    OK 1 [ OK ]

Configuring Oracle VM...

Enter new root password:
Confirm password:

Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:

Configuring network.

```

注記 - root および Oracle VM Agent のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM サーバーを最初にブートしたときだけ表示されます。

7. プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関するほかの必須構成情報を構成および入力します。

```

This tool is used to select the NIC used by the OUM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
    eth0  eth1  eth2  eth3

Please select interface(s) to be used for OUM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1

```

8. すべての構成内容が正しければ、「Y」と入力し、Enter キーを押して設定を保存します。

```
Are these settings correct?(Y/n)
```

すべての設定を入力して保存すると、次に示すとおり、システムに Oracle VM Server コンソールセッションがロードされます。

```
Oracle VM Server 3.0.2 Console [Alt-F2 for login console]

Local hostname      : lynxp-ovm.us.oracle.com
Manager UUID        : 0004fb0000010000a060c639d1075957
Hostname            : None
Server IP           : None
Server Pool         : None
Clustered           : No
Server Pool Virtual IP : None
Cluster state       : Offline
Master Server       : No
Cluster type        : None
Cluster storage     : None

OVS Agent           : Running
VMs running         : 0
System memory       : 4087
Free memory         : 2439
Uptime              : 0 days, 4 hours, 33 minutes_
```

これで、仮想オペレーティングシステムを作成するための、インストール済み Oracle VM Server の構成が完了します。

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM の使用の詳細な情報については、次にある Oracle VM ドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

インストール済みの Oracle Linux OS の構成

オプションのインストール済み Oracle Linux OS イメージを購入した場合、インストール済みのソフトウェアを構成することによってインストールを完了させます。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

次の表で、インストール済み Oracle Linux OS を構成するために必要なタスクについて説明します。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境の Oracle Linux 構成ワークシートに記入します。	129 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」
2	インストール済みの Oracle Linux OS を構成します。	130 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS を構成する」
3	Oracle Linux OS を更新し登録します。	133 ページの「Oracle Linux OS を登録および更新する」

Oracle Linux 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成作業を開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle Linux の root パスワード	root パスワードを選択して出荷時デフォルトのパスワードを置き換えます。文字および長さに制限はありません。	
ネットワークインタフェース	ネットワークに接続するサーバーのインタフェース (eth#) を選択します。(Linux が稼働を始めていれば、 <code>ifconfig -a</code> コマンドを使用することでサーバーのネットワークポートを識別できます。)	
ネットワーク構成 (DHCP を使用しない場合)	サーバーの IP アドレスを入力します。 例: 172.16.9.1	

必要なインストール情報	説明	回答
	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。	
	例: 255.255.0.0	
	サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを入力します。	
	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを入力します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。	

関連項目

- [130 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS を構成する」](#)

▼ インストール済みの Oracle Linux OS を構成する

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle Linux を構成する方法について説明します。

1. サーバーの Oracle ILOM にログインしていない場合は、直接シリアル接続からローカルでログインするか、Ethernet 接続からリモートでログインします。

[「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。

2. 次のようにして、ホストの電源を入れるか、サーバーを再起動します。

- ホストの電源を投入するには、次の**いずれか**の方法を使用します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」をクリックし、メニューで「Power On」をクリックします。

- Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーを再起動するには、次の**いずれか**の方法を使用します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」をクリックし、メニューから「Reset」を選択します。

- ILOM CLI で、次のように入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

3. Oracle ILOM で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」>「Launch Remote Console」をクリックします。

- Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

ホストがブートすると、「GRUB」メニューが表示されます (次の例を参照)。一時停止するには Enter 以外のキーを押します。そうしないと、5 秒後に強調表示された選択が使用されます。

```
GNU GRUB version 0.97 (612K lower / 2082932K upper memory)
```

```
+-----+
| Oracle Linux Server-uek (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64) |
| Oracle Linux Server (2.6.32-279.el6.x86_64)             |
+-----+
```

```
+-----+
| Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted. |
| Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the       |
| commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments |
| before booting, or 'c' for a command-line.                 |
+-----+
```

```
The highlighted entry will be booted automatically in 5 seconds.
```

4. 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用してインストールオプションを選択してから、Enter を押します。

次のオプションがあります。

- Unbreakable Enterprise Kernel。例:

```
Oracle Linux Server-uek (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64)
```

- Red Hat 互換カーネル。例:

```
Oracle Linux Server (2.6.32-279.el6.x86_64)
```

注記 - Oracle では、すべてのエンタープライズアプリケーションで、Oracle Linux と Unbreakable Enterprise Kernel を使用することをお勧めします。

インストールオプションを選択すると、Linux が起動します。完了すると、Linux システムのログインが表示されます。例:

```
Oracle Linux Server release 6.3
Kernel 2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64 on an x86_64
```

systemname login:

初回ログインの場合は、**root** アカウントと出荷時デフォルトのパスワード (**root**) を使用します。

5. ログイン後に、標準の Linux ツールを使用してサーバーの構成を完了します。

次のタスクが含まれます。

- セキュリティーのため、**root** の出荷時デフォルトのパスワードを変更します。
- ネットワークのサーバーを構成します (DHCP を使用しない場合)。129 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」を参照してください。
- 必要に応じて、インターネットアクセス用のプロキシを構成します。
- サーバーを登録し更新します。133 ページの「Oracle Linux OS を登録および更新する」を参照してください。
- 目的のパッケージをインストールします。

6. 構成が完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Console」ウィンドウを閉じて、Oracle ILOM からログアウトします。
- Oracle ILOM CLI で、Esc キーのあとに「(」キー (Shift + 9) を押してシリアルリダイレクトセッションを終了し、Oracle ILOM からログアウトします。

参照 ■ 133 ページの「Oracle Linux OS を登録および更新する」

▼ Oracle Linux OS を登録および更新する

始める前に Unbreakable Linux Network (ULN) は、Oracle Linux サポートのサブスクリイバのための包括的なリソースであり、Linux ソフトウェアのパッチ、更新、および修正と、更新およびサポートポリシーに関する情報へのアクセスを提供します。

アクティブな Oracle Linux サポートのサブスクリプションを持つ、Oracle のライセンス所有のお客様の場合は、Oracle Linux CSI (カスタマサポート ID) 番号を受け取ります。この番号を使用して、サーバーを ULN に登録します。登録には CSI 番号と有効な電子メールアドレスが必要です。

1. まだアカウントがない場合は、ULN アカウントを作成します。電子メールアドレスと CSI を使用して、パスワードを作成します。

<https://linux.oracle.com/register>

アカウントを構成すると、電子メールアドレスとパスワードを使用して ULN にログインできます。

2. アカウントを作成したら、端末ウィンドウまたはコマンド行で、root ユーザーとしてサーバーで下のコマンドを実行します。

uln_register

uln_register ウィザードによってマシン情報が収集され、Oracle にアップロードされます。

上のコマンドを実行すると、デフォルトのチャネル `ol6_<arch>_latest` が選択されます。

`_latest` チャネルは、ディストリビューションのすべてのパッケージの RPM を提供します (`_patch` チャネルでも提供される訂正を含む)。`_latest` チャネル上でダウンロードできる RPM はすべて入手可能な最新バージョンです。登録後に、Web インタフェースを使用してほかのチャネルにサブスクライブできます。

参照 ■ 登録プロセスの詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/topics/linux/yum-repository-setup-085606.html>

■ Oracle Unbreakable Linux Network の詳細については、次を参照してください。

<https://linux.oracle.com/>

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアの更新について学びます。	135 ページの「ファームウェアとソフトウェアの更新」
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	136 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」
使用可能なファームウェアとソフトウェアパッケージを確認します。	136 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」
Oracle System Assistant, My Oracle Support、または物理メディアのリクエストにより、ファームウェアおよびソフトウェアパッケージにアクセスします。	138 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」
ファームウェアとソフトウェアの更新をインストールします。	142 ページの「更新のインストール」

ファームウェアとソフトウェアの更新

サーバー用のハードウェアドライバやツールなどのファームウェアおよびソフトウェアは、定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバー用の使用可能なファームウェア、ハードウェアドライバ、ユーティリティをすべて含んだ一連のダウンロード (パッチ) です。これらはすべてまとめてテストされています。ダウンロードに含まれる ReadMe ドキュメントには、以前のソフトウェアリリースからの変更点および変更されていない点が説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になりしだい、更新してください。ソフトウェアリリースにはしばしばバグの修正が含まれるため、更新により、サーバーソフトウェアと、最新のサーバーファームウェアおよびほかのコンポーネントのファームウェアとソフトウェアとの互換性が保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイル、および現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれます。プロダクトノートには、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も含まれます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

次のオプションのいずれかを使用して、使用するサーバー用の最新ファームウェアおよびソフトウェアセットを入手します。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされる Oracle サーバー用の新しいオプションであり、サーバーのファームウェアおよびソフトウェアを簡単にダウンロードおよびインストールできるように支援します。

Oracle System Assistant の使用方法については、『*Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド*』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

- **My Oracle Support** – すべてのシステムファームウェアおよびソフトウェアは、My Oracle Support Web サイトから入手できます。

My Oracle Support Web サイトで入手可能なものの詳細については、<https://support.oracle.com> を参照してください。

My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法は、[138 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)を参照してください。

- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。

詳細は、[139 ページの「物理メディアをリクエストする」](#)を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support では、ダウンロードは製品ファミリ、製品、およびバージョン別にグループ分けされています。バージョンには 1 つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

次の表に示すように、My Oracle Support には、このサーバーファミリ向けの同じダウンロードタイプのセットが含まれます。これらも、物理メディアのリクエスト (PMR) を行なって依頼できます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
Sun Server X4-8 SW <i>version</i> – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要なとき。
Sun Server X4-8 SW <i>version</i> – OS Pack	OS Pack は、サポートされるオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。各 OS Pack には、その OS バージョン用のすべてのツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージが含まれます。 ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。 Windows OS の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティを更新する必要があるとき。
Sun Server X4-8 SW <i>version</i> – All Packs	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。 このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があるとき。
Sun Server X4-8 SW <i>version</i> – Diagnostics	Oracle VTS 診断イメージ。	Oracle VTS 診断イメージが必要なとき。
Sun Server X4-8 SW <i>version</i> – Oracle System Assistant	Oracle System Assistant 復旧 および ISO 更新イメージ。	Oracle System Assistant を手動で復旧または更新する必要があるとき。

各ダウンロードは zip ファイルで、ReadMe ファイル、およびファームウェアやソフトウェアファイルを含むサブディレクトリセットが格納されています。ReadMe ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントおよび修正されたバグの詳細が記載されています。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルのダウンロードまたはリクエストの手順を説明します。

Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細については、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

更新されたファームウェアおよびソフトウェアを入手する方法は、ほかにも My Oracle Support を使用する方法と、物理メディアをリクエストする方法の 2 つがあります。参照先:

- 138 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」
- 139 ページの「物理メディアをリクエストする」

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード

1. 次の Web サイトへ移動します: <https://support.oracle.com>
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
4. 「検索」画面で、「製品またはファミリ (拡張)」をクリックします。
画面に検索フィールドが表示されます。
5. 「製品」フィールドのドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、製品名 (たとえば、Sun Server X4-8) の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。
6. 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
7. 「検索」をクリックします。
ダウンロードできるパッチが一覧表示されます。

入手可能なダウンロードの説明については、[136 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」](#)を参照してください。

8. **ダウンロードするパッチを選択するには、そのパッチをクリックします (Shift キーを使用すると、複数のパッチを選択できます)。**

ポップアップアクションパネルが表示されます。ポップアップパネルには、「計画に追加」および「ダウンロード」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するドロップダウンボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。

9. **パッチをダウンロードするには、ポップアップアクションパネルの「ダウンロード」をクリックします。**

「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。

10. **「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの zip ファイルをクリックします。**

パッチファイルがダウンロードされます。

物理メディアをリクエストする

Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) で最新のソフトウェアリリースを入手できます。

物理メディアのリクエストを行うための大まかなタスクに従ってください。

- [139 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」](#)
- [140 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)
- [141 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

物理メディアのリクエストのための情報の収集

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- **製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。最新のソフトウェアリリースおよびリクエストしているダウンロードパッケージ (パッチ) の名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。**

- *My Oracle Support* にアクセスできる場合 - 138 ページの「[My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード](#)」の手順に従って、最新のソフトウェアリリースを確認し、入手可能なダウンロード (パッチ) を表示します。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチ検索結果」ページからほかのページに移動できます。
- *My Oracle Support* にアクセスできない場合 - 136 ページの「[入手可能なソフトウェアリリースパッケージ](#)」にある情報を使って、目的のパッケージを判断してから、最新のソフトウェアリリース用のこれらのパッケージをリクエストしてください。
- 送付先情報を用意します。リクエストの際に、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および送付先住所を提供する必要があります。

関連情報

- [140 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)
- [141 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

1. 次の Web サイトへ移動します: <https://support.oracle.com>。
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページの右上隅にある「問合せ」リンクをクリックします。
4. 「リクエストの説明」セクションに、次の情報を入力します。
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。
ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドに、「Sun Server X4-8 の最新ソフトウェアリリースの PMR」と入力します。
5. 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します。

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか？	はい
どの製品ラインに關係するメディアのリクエストですか？	Sun 製品

質問	回答
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか？	いいえ
CD/DVD でのパッチのリクエストですか？	はい
パッチを CD や DVD でリクエストする場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
ご希望の製品名とバージョンをお知らせください。	製品名: Sun Server 4-8 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
リクエストするメディアの OS とプラットフォームをお知らせください。	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「汎用」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

6. 出荷先担当者の連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所の情報を入力します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「ファイルのアップロード」の「関連ファイル」画面で「次へ」をクリックします。
情報を指定する必要はありません。
9. 「関連ナレッジ」画面で、リクエストに該当するナレッジ記事を確認します。
10. 「送信」をクリックします。

- 参照 ■ 139 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」
■ 141 ページの「物理メディアのリクエスト (電話)」

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

1. 次の Oracle Global Customer Support Contacts Directory にある該当する番号を使用して、Oracle サポートに電話をかけます。
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
2. Sun Server 4-8 の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を Oracle サポートに伝えます。

- My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
- ソフトウェアのリリース情報にアクセスできない場合は、Sun Server X4-8 の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

- 参照
- [139 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」](#)
 - [140 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)

更新のインストール

次のセクションでは、ファームウェアとソフトウェアの更新のインストールに関する情報を提供します。

- [142 ページの「ファームウェアのインストール」](#)
- [143 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」](#)

ファームウェアのインストール

更新されたファームウェアは、次のいずれかの方法でインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller で最新のファームウェアを Oracle から自動的にダウンロードすることも、Enterprise Controller に手動でロードすることもできます。どちらの場合も、Ops Center で 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシ上にファームウェアをインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、最新のファームウェアを Oracle からダウンロードしてインストールできます。

詳細については、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用して、システム内部のファームウェアを更新できます。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> で Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。

- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新可能な唯一のファームウェアです。

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> で Oracle Lights Out Manager (ILOM) ドキュメントライブラリのサポートされているバージョンのドキュメントを参照してください。

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール

Oracle Hardware Management Pack などの、更新されたハードウェアドライバおよびオペレーティングシステム (OS) 関連のツールは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center**

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant**

詳細については、『Oracle x86 X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

- JumpStart、KickStart、サードパーティーのツールなどの、その他の配備メカニズム。
詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

システム電源の制御

この章では、サーバーの電源を投入および切断する方法について説明します。次が含まれます。

- [145 ページの「サーバーの電源投入と電源切断」](#)
- [146 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を切断する」](#)
- [146 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を投入する」](#)
- [147 ページの「Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する」](#)

サーバーの電源投入と電源切断

サーバーの電源状態には電源切断、スタンバイ電源、フル電源の 3 つがあります。

電源状態	説明	インジケータ	アクション
電源切断	サーバーの電源が完全に切断されるのは、AC 電源コードを抜いたときです。	サーバーはすべての電源から切断されています。	電源を完全に切断するには、電源コードを引き抜きます。 注意 - 装置の損傷。システムがフル電源モードのときに電源コードを抜かないでください。
スタンバイ電源	サーバーがスタンバイ電源モードのとき、Oracle ILOM の電源は投入されますがホストの電源は切断されます。	電源 OK インジケータが点滅しています。 サービスプロセッサの OK インジケータが常時点灯しています。	サーバーの電源が完全に切断されている場合、電源コードを差し込むとスタンバイ電源が投入されます。 サーバーがフル電源モードの場合、Oracle ILOM または埋め込み式のボタンを使用してホストを電源から切断します。 ホストの電源を正常に切断することも、すぐに切断することもできます。 注意 - データ損失: データの損失を防ぐには、電源の即時切断を実行する前に、シャットダウンに向けてオペレーティングシステムの準備を行ってください。
フル電源	ホストの電源を投入すると、サーバーはフル電源モードに入ります。	フル電源モードでは、電源 OK インジケータが常に点灯しています。	Oracle ILOM または埋め込み式の電源ボタンを使用して、ホストに電源を投入します。

関連項目:

- [146 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を切断する」](#)
- [146 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を投入する」](#)
- [147 ページの「Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する」](#)

▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を切断する

1. サーバーのフロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンの位置を確認します。
2. 埋め込み式の電源ボタンを押します。

- 正常なシャットダウンを実行する場合、電源ボタンを押して離します。

ACPI に対応したオペレーティングシステムでは正常なシャットダウンが実行されます。ACPI に対応したオペレーティングシステムを実行していないシステムでは、このイベントが無視され、ホストのシャットダウンが失敗する可能性があります。

電源 OK インジケータが点滅しています。サービスプロセッサのインジケータが常時点灯しています。

- 即時シャットダウンを実行する場合、電源ボタンを 5 秒以上押し続けます。

電源 OK インジケータが点滅しています。サービスプロセッサのインジケータが常時点灯しています。



注意 - データ損失。即時停止すると、すべてのアプリケーションとファイルは、変更が保存されずに突然終了されます。

- サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を投入する

1. サーバーがスタンバイ電源モードであることを確認します。

ホストの電源は切断されていますが、SP の電源は入っています。電源装置が電源に接続されており、OK ステータスインジケータが点滅しています。

2. フロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンの位置を確認します。

3. 埋め込み式の電源ボタンを押します。

ホストがブートし、サーバーがフル電源モードに入ります。ホストが完全にブートされると、電源 OK インジケータが常時点灯状態になります。

▼ Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する

次に、サーバーサービスプロセッサ (SP) に対する Web の手順とコマンド行インタフェース (CLI) の手順の両方を記します。

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使えば、ホストの電源の投入や切断をリモートから行えます。



注意 - データ損失。即時停止すると、すべてのアプリケーションとファイルは、変更が保存されずに突然終了されます。

- Oracle ILOM Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI を使用して電源を制御します。

管理者権限でログインする必要があります。詳細は、「[Oracle ILOM への接続](#)」を参照してください。

■ Oracle ILOM Web インタフェースで次のいずれかを実行します。

注記 - これらのコマンドはホストの電源に適用され、SP の電源には影響しません。サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

- a. 「Host Management」>「Power Control」をクリックします。
- b. 「Settings」ドロップダウンメニューから、次のいずれかを選択します。
 - Reset: 電源を切断せずにオペレーティングシステムをリセットします。
 - Immediate Power-Off: ホストの電源をただちに切断します。
 - Graceful Shutdown and Power Off: オペレーティングシステムを正常にシャットダウンし、システムの電源を切断します。
 - Power On: 電源を全投入します。

- Power Cycle: ホストの電源をただちに切断したあと、電源を再投入します。

■ Oracle ILOM CLI から、次のいずれかのコマンドを入力します。

- `reset /SYSTEM`: 電源を切断せずにホストをリセットします。
- `stop /SYSTEM`: ホストを正常にシャットダウンし、電源を切断します。
- `stop -f /SYSTEM`: ホストの電源をただちに切断します。
- `start /SYSTEM`: 電源を全投入します

参照 ■ 『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「ホスト電源の制御」。

設置の問題のトラブルシューティング

このセクションでは、設置の問題のトラブルシューティングに関する情報を提供します。

説明	リンク
トラブルシューティングについて学習し、診断の参考情報を入手します。	149 ページの「トラブルシューティングおよび診断の参考」
サーバーの情報を記録してから保守部門に連絡します。	149 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号の場所を確認してから保守部門に連絡します。	150 ページの「サーバーのシリアル番号の確認」

トラブルシューティングおよび診断の参考

『Sun Server X4-8 サービスマニュアル』には製品固有のトラブルシューティング情報が記載されています。

『Oracle x86 サーバー診断ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) には、Oracle の x86 サーバー用に使用できるさまざまなツールについての情報が記載されています。

ナレッジ記事、ホワイトペーパー、製品アップデートは、Oracle サポートポータルから入手できます。

<https://support.oracle.com>

技術サポート情報ワークシート

トラブルシューティング情報を使用しても問題を解決できない場合は、サポートに電話をする前に次の情報を収集します。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題のサマリーと、問題が発生したときに実行した操作内容	
IP アドレス	
サーバー名 (システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

サーバーのシリアル番号の確認

次のいずれかの方法を使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。あとで使用するときのために、この番号を記録しておいてください。

- フロントパネルのベゼルの左下を確認します。
- サーバーの Oracle Sun Server X4-8 パッケージに付属している黄色い Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートにシリアル番号が記載されています。
- Oracle ILOM から次のようにします。
 - Web インタフェースを使用してログインし、「Summary」ページを表示します。
 - CLI をを使用してログインし、次のコマンドを入力します。

show /System

索引

数字・記号

AC 電源

スタンバイ, 145

フル, 145

AC OK インジケータ, 13, 17

Ethernet ケーブル, 接続, 48

Ethernet 接続

Oracle ILOM へのログイン, 54

Gigabit Ethernet (LAN) コネクタ, 48

Hardware Management Pack

概要, 25

My Oracle Support, ソフトウェアリリースパッケージのダウンロードに使用する, 138

Oracle ILOM

Oracle System Assistant の起動, 70

初期設定と構成, 51

接続, 51

デフォルトのユーザー名とパスワード, 53, 54

Oracle Linux

構成, 129, 130

構成ワークシート, 129

登録, 133

Oracle Solaris OS, 115

インストール済み, RAID デフォルト構成, 116

インストール済みソフトウェアの構成, 116, 118

Oracle System Assistant

Oracle ILOM を使用した起動, 70

ローカルで起動する, 72

Oracle System Assistant を使用したハードドライブの準備, 79

SER MGT/RJ-45 ポート

位置, 47

SP NET MGT Ethernet ポート, 48

Unified Extensible Firmware Interface (UEFI)

概要, 26

ブートモード

説明, 26

あ

インジケータ

バックパネル, 17

フロントパネル, 13

インストール済みオペレーティングシステム

Oracle Solaris, 構成, 116

インストール済みのオペレーティングシステム

Oracle VM, 構成, 123

インストール済み OS オプション

Oracle Linux, 129

インベントリ

パッケージの内容, 32

オプション

サーバーコンポーネント, 32

オペレーティングシステム

Oracle Linux

インストール済みソフトウェアの構成, 129

Oracle Solaris OS

再インストール, 120

ダウンロード, 120

Oracle VM

インストール済みソフトウェアの構成, 123

Oracle Solaris OS, インストール済みソフトウェアの構成, 116

インストール済みイメージの構成, 129

か

外部ケーブル, 接続, 48

環境要件, 30

ケーブル

接続, 48

工具および装置

サーバーの取り付けに必要, 32

構成

Oracle Linux, 129

コネクタ

位置, 48

コンソール

シリアル, 53

必要なデバイス, 32

さ

サーバーの開梱, 32

システムステータスインジケータ

フロントパネル, 13, 13

出荷梱包箱

内容, 32

仕様

環境, 30

電気, 30

物理, 29

シリアル接続

Oracle ILOM へのログイン, 53

シリアルヌルモデムケーブル

接続, 48

スタンバイ電源モード, 145

正常な電源切断, 146, 147

静電気防止用リストストラップ, 33

静電放電 (ESD)

安全対策, 33

設置タスクの概要, 11

即時電源切断, 146, 147

ソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support を使用してダウンロードする, 138

た

注意事項, 33

電気仕様, 30

電源

状態, 145

スタンバイ, 145

フル, 145

ボタン, 146

電源ケーブル, 接続, 48

電源障害インジケータ

位置, 17

電子部品

静電気損傷からの保護, 33

電力消費数

意味, 30

ドキュメント

診断, 149

は

ハードドライブ, Oracle System Assistant を使用した準備, 79

バックパネル

機能, 17

コネクタ, 17, 47

ファンモジュール

保守要求 LED, 16

物理仕様, 29

フル電源モード, 145

フロントパネル

機能, 13, 13

ポート

SER MGT/RJ-45, 48

SP NET MGT Ethernet, 48

ボリューム, Oracle System Assistant を使用した作成, 79

ら

ラックの安全のための注意事項, 35

ラックの互換性, 確認, 36

ラックマウント

キット, 35

レール構成部品, 35

レール構成部品, 35